鹿児島県

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(148)

油免・本寺遺跡

二〇一〇年三月　鹿児島県立埋蔵文化財センター

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（148）

国道226号特殊改良工事（万世拡幅）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

油免（あぶらめん）・本寺（もとでら）遺跡

（南さつま市）

2010年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

SF001-油免・本寺遺跡表紙.indd　1　2010/03/12　13:34:51

序　　文

この報告書は国道226号特殊改良工事（万世拡幅）に伴って，平成21年度に実施した南さつま市に所在する油免・本寺遺跡の発掘調査の記録です。油免・本寺遺跡は，南さつま市加世田の市街地の西側に所在し，標高約22mほどのシラス台地に位置します。

南さつま市には縄文時代から近世・近代に至るまで数多くの著名な遺跡が存在しています。本遺跡のある加世田には，縄文時代草創期の調査で南九州の縄文文化の先進性を示す貴重な発見となった国指定である栫ノ原遺跡や草創期の土器としては日本最大と言われる土器が出土した志風頭遺跡が存在しています。

今回の発掘調査では，狭い調査範囲の中に，主に縄文時代晩期，弥生時代，古墳時代，更に中世から近世に至るまでの遺構，遺物が発見されました。特に弥生時代においては，黒髪式土器が出土し，九州中央部との交流が行われたことが予想されます。今後，これらの調査成果が県内における調査・研究に大きな役割を果たすものと期待しています。

本報告書が，県民の皆様をはじめとする多くの方々に活用され，埋蔵文化財に対する関心とご理解をいただくとともに，文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

最後に，調査に当たりご協力いただいた南薩地域振興局建設部土木建築課，南さつま市教育委員会，関係各機関及び発掘調査に従事された地域の方々に厚くお礼申し上げます。

平成22年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所　長　　山　下　吉　美

報　告　書　抄　録

ふりがな	あぶらめん・もとでらいせき
書名	油免・本寺遺跡
副書名	国道226号特殊改良工事（万世拡幅）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	148
編集者名	岩屋高広・井口俊二
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所在地	〒899－4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号　TEL 0995-48-5811
発行年月日	西暦2010年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査起因
あぶらめん・もとでら 油免・本寺遺跡	かごしまけん 鹿児島県 みなみ 南さつまし 市 加世田 唐仁原	46220	4-82	31° 25′ 22″	130° 18′ 20″	試掘調査 20070703 ～ 20070704 本調査 20090608 ～ 20090807	16.84㎡ 901㎡	国道226号特殊改良工事（万世拡幅）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
あぶらめん・もとでら 油免・本寺遺跡	散布地	縄文時代前期 縄文時代後期 縄文時代晩期 弥生時代中期 古墳時代 中世 近世	溝状遺構（１条） 掘立柱建物跡（１棟）	深浦式土器 西平式土器 深鉢，浅鉢，入佐式土器，黒川式土器，石鏃，石錘，磨石，敲石 入来式土器 山ノ口式土器 黒髪式土器 成川式土器 青磁，肥前系陶磁器，在地系陶磁器（薩摩焼，染付），管状土錘，古銭（宋元通寶）	

遺跡の概要	油免・本寺遺跡では，縄文時代前期から近世までの遺構・遺物が発見されている。遺構では，古墳時代の溝状遺構が検出され，成川式土器が埋土中から出土した。また，中世以降に建てられたと思われる掘立柱建物跡が１棟検出された。うち２個の柱穴の底から古銭が出土し，祭祀等に関連したものではないかと考えられる。中近世の遺物は，青磁や肥前系の陶磁器も表土から出土している。万之瀬川流域から出土された遺物と比較検討し，交易等の関わりについて実証していく必要がある。

遺跡位置図　　1/25000

例　　言

1　本書は，国道226号特殊改良工事（万世拡幅）に伴う油免・本寺遺跡の発掘調査報告書である。

2　本遺跡は，鹿児島県南さつま市加世田唐仁原に所在する。

3　発掘調査及び報告書作成（整理作業）は，鹿児島県土木部道路建設課から鹿児島県教育委員会が受託し，鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。

4　油免・本寺遺跡の発掘調査は，平成21年６月８日から８月７日まで実施した。

5　遺物番号は通し番号とし，挿図，表，図版の番号は一致する。

6　挿図の縮尺は，各図面に示した。

7　本書で用いたレベル数値は，鹿児島県土木部道路建設課が提示した工事計画図面に基づく海抜絶対高である。

8　遺構実測図の浄書及び出土遺物の実測・浄書は整理作業員の協力を得て調査担当者が行った。本報告書に使用した写真図版のうち，遺物の写真撮影は，吉岡康弘と辻明啓が行った。

9　周辺地形図・トレンチ配置図等のデジタルトレースは担当職員が行った。

10　本書の執筆・編集は，岩屋高広と井口俊二が担当した。

11　遺物は，鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し，展示・活用する予定である。なお，遺物注記の略号はアブラメンである。

目　　次

序文
報告書抄録
例言
目次
第Ⅰ章　発掘調査の経緯…… 1
　第１節　調査に至るまでの経緯…… 1
　第２節　事前調査（平成19年度）…… 1
　第３節　確認，本調査・報告書作成…… 2

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境…… 4
　第１節　地理的環境…… 4
　第２節　歴史的環境…… 4

第Ⅲ章　調査の概要…… 8
　第１節　発掘調査の方法…… 8
　第２節　層位…… 8

第Ⅳ章　調査の成果…… 12
　第１節　縄文時代の調査…… 12
　　１　縄文時代前期・後期の調査…… 12
　　２　縄文時代晩期の調査…… 13
　第２節　弥生時代の調査…… 20
　第３節　古墳時代の調査…… 25
　第４節　古代・中世の調査…… 30
　第５節　近世の調査…… 32

第Ⅴ章　まとめ…… 34
写真図版
あとがき

挿図目次

第１図　試掘調査トレンチ位置図……２
第２図　周辺遺跡位置……６
第３図　油免・本寺遺跡の基本土層図……８
第４図　地形図及びグリッド配置図……９
第５図　土層図(1)……10
第６図　土層図(2)……11
第７図　縄文時代前期・後期遺物出土状況……12
第８図　縄文時代前期・後期の土器……12
第９図　縄文時代晩期の土器(1)……13
第10図　縄文時代晩期の土器(2)……14
第11図　縄文時代晩期の土器(3)……15
第12図　縄文時代晩期の石器(1)……16
第13図　縄文時代晩期の石器(2)……17
第14図　縄文時代晩期の石器(3)……18
第15図　縄文時代晩期遺物出土状況……19
第16図　弥生時代の土器(1)……20
第17図　弥生時代の土器(2)……21
第18図　弥生時代の土器(3)，石器……22
第19図　弥生時代の遺物出土状況……24
第20図　溝状遺構……25
第21図　古墳時代の土器……26
第22図　古墳時代の遺物出土状況……27
第23図　掘立柱建物跡とピット群の位置図……29
第24図　掘立柱建物跡柱穴断面……30
第25図　古銭Ｘ線写真……30
第26図　古代・中世の遺物……31
第27図　近世の遺物……33
第28図　時代別遺物出土の割合……34

表目次

第１表　周辺遺跡地名表……７
第２表　縄文時代前期・後期土器観察表……12
第３表　縄文時代晩期の土器観察表……15
第４表　縄文時代晩期の石器観察表……18
第５表　弥生時代の土器観察表……23
第６表　弥生時代の石器観察表……23
第７表　古墳時代の土器観察表……28
第８表　柱穴埋土状況観察表……30
第９表　古代・中世の遺物観察表（須恵器，土師器）……32
第10表　古代・中世の遺物観察表（陶磁器）……32
第11表　近世の遺物観察表（陶磁器）……32

第Ⅰ章　発掘調査の経緯

第１節　調査に至るまでの経緯

鹿児島県教育委員会は，文化財の保護・活用を図るために，各開発関係機関との間で，事業区域内における文化財の有無及びその取扱いについて協議し，諸開発との調整を図っている。

この事前協議制に基づき，南薩地域振興局建設部土木建築課が計画していた国道226号特殊改良工事（万世拡幅）に先だって，対象地域内における埋蔵文化財の有無について，平成19年に鹿児島県教育庁文化財課（以下　県文化財課）に照会した。対象地は周知の油免・本寺遺跡地であり，県土木建築課はその取扱いについて協議した。その結果，文化財課が平成19年７月３，４日に試掘調査を実施したところ，２か所のトレンチから遺物が出土し，この範囲に遺跡が存在していることを確認した。また，本遺跡は字名が本寺ということもあり，特に寺院関係遺跡の存在も予想された。

この結果を受けて，鹿児島県土木部道路建設課・県文化財課・県立埋蔵文化財センター（以下埋文センター）の三者で協議した結果，現状保存や設計変更が不可能であることから，記録保存のための本調査を埋文センターが担当して実施することになった。

第２節　試掘調査（平成19年度）

１　調査の組織

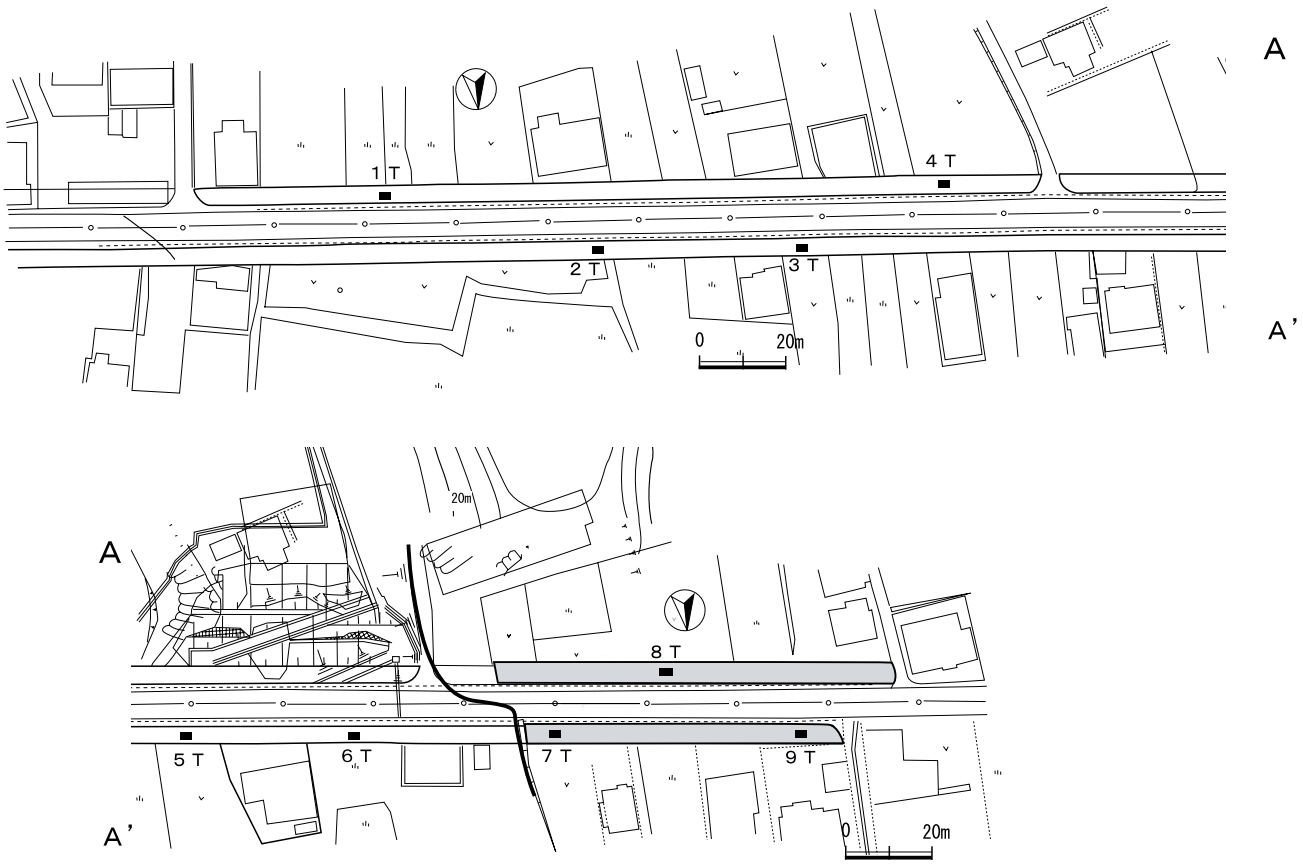
事業主体	鹿児島県土木部道路建設課（南薩地域振興局建設部土木建築課）		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
調査担当者	鹿児島県教育庁文化財課	文化財主事	前迫　亮一
調査協力者	南さつま市教育委員会文化課	事務主査	上東　克彦
	〃	〃	福永　裕暁
	鹿児島県立埋蔵文化財センター	文化財主事	岩澤　和徳
	〃	〃	中村　幸一郎
	〃	〃	西園　勝彦

２　調査の経緯

試掘調査〈平成19年７月３日（火）～４日（水）〉

調査は現道の両側に新しく設置される幅約５ｍの歩道建設予定部分を対象として実施した。全長約380ｍの調査可能な土地の中から９か所を選定し，それぞれに約２ｍ×１ｍのトレンチを設定した。掘削作業は，土地が狭小なため重機は使用せず，人力で慎重に行った。

調査対象地区は周知の埋蔵文化財包蔵地で，実際に周辺の畑表面で古墳時代の土器片が採集できることから，遺跡の存在が想定されたが，調査の結果，遺物包含層（古墳時代）を確認できたのは８，９トレンチのみであった。このことから，７トレンチの東側にある谷部より西側について，遺物が残存している可能性が判明した。



第１図　試掘調査トレンチ位置図

第３節　確認・本調査・報告書作成（平成21年度）

１　調査の組織

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課（南薩地域振興局建設部土木建築課）			
調査主体	鹿児島県教育委員会			
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	山下	吉美
調査企画	〃	次長兼総務課長	齊藤	守重
	〃	次長兼南の縄文調査室長	青﨑	和憲
	〃	調査第一課長	中村	耕治
	〃	主任文化財主事兼調査第一課第一調査係長	井ノ上	秀文
調査担当者	〃	文化財主事	岩屋	高広
	〃	文化財主事	井口	俊二
調査事務担当者	〃	総務係長	紙屋	伸一
	〃	主査	鳥越	寛晴
報告書作成検討委員会	平成21年11月13日　山下所長ほか　10名			
報告書作成指導委員会	平成21年11月９日　青﨑次長ほか　３名			
企画担当者		文化財主事	岩澤	和徳

２　調査の経緯（日誌抄）

調査の経過については，調査日誌をもとに，主な出来事を週単位で記していきたい。

本調査〈平成21年６月８日（月）～８月７日（金）〉

６月８日（月）

作業員雇用開始。オリエンテーション。プレハブ・調査区周辺環境整備。重機による表土剥ぎ。

９日（火）～12日（金）

グリッド杭設置。ベルトコンベア設置。Ａ－２～10区Ⅰb層掘り下げ。Ａ－10区に11トレンチ設置，表採より石鏃出土。10日（水）山下所長，青﨑次長現地指導のため来跡。

15日（月）～19日（金）

Ａ－２～６区Ⅰb～Ⅲa層掘り下げ，遺物取り上げ，Ⅲa層上面地形図作成。Ａ－３区Ⅲa層上面でピット１・５検出。検出状況・半裁写真撮影，断面実測。Ｂ－５・６区Ⅰb層掘り下げ。

22日（月）～26日（金）

Ａ－３区Ⅲa層上面でピット２・４検出，検出状況写真撮影，実測，半裁・断面写真撮影。Ａ－３～５区Ⅲa層遺物取り上げ。Ａ－７・８区，Ｂ－６区Ⅲa層上面地形図作成。Ａ－５～８区Ⅳ層掘り下げ。Ｂ－４区12トレンチ北壁土層断面実測。Ｂ－８・９区Ⅰb・Ⅱ層掘り下げ，遺物取り上げ，地形図作成。Ｂ－８・９区Ⅲa層掘り下げ。Ｂ－８区溝状遺構検出。

７月１日（水）～３日（金）

Ａ－３区ピット１・４完掘・実測。Ｂ－２・３・５・６区調査終了。Ｂ－８区溝状遺構掘り下げ。

６日（月）～10日（金）

Ａ－３区Ⅲa層上面検出ピット６～９半裁・完掘状況写真撮影，実測。Ｂ－８区溝状遺構掘り下げ，土層断面実測，遺物取り上げ，完掘状況写真撮影。Ｂ－８・９区Ⅲa層遺物取り上げ。

13日（月）～17日（金）

Ａ－３区Ⅲa・Ⅲb層掘り下げ，ピット13・14検出。Ａ－３区ピット４古銭出土状況写真撮影。ピット３・10半裁，実測，完掘状況写真撮影。Ｂ－２・３区土層断面写真撮影，実測。Ｂ－８・９区Ⅲa・Ⅲb層掘り下げ。Ｂ－５・６区土層断面写真撮影，実測。Ａ－３～７区，Ｂ－６・７区Ⅲa層掘り下げ，遺物取り上げ。Ａ－７・８区，Ｂ－２・３・５～９区下層確認トレンチ掘り（Ⅳ～Ⅵ層）。

21日（火）～24日（金）

Ａ－２区Ⅲa・Ⅲb層掘り下げ。Ａ－２区下層確認トレンチ掘り（Ⅳ～Ⅵ層）。Ａ－３～５区土層断面掃除，写真撮影。Ａ－６～８区南壁写真撮影。Ａ－５，Ｂ－６・７区土層断面実測。Ｂ－６・７区下層確認トレンチ掘り（Ⅳ～Ⅵ層）。Ｂ－６～９区Ⅳ層掘り下げ，土層断面写真撮影。

27日（月），28日（火）

Ａ－２区下層確認トレンチ掘り（Ⅳ～Ⅵ層）。Ａ－２～４区，Ｂ－８・９区土層断面実測。調査区一部埋め戻し。

８月３日（月）～７日（金）

Ａ－２区下層確認トレンチ掘り（Ⅴ～Ⅵ層）。調査区埋め戻し完了。調査区･事務所周辺環境整備。写真・図面・遺物整理。７日（金）発掘調査終了。発掘現場引き渡し。

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

油免・本寺遺跡は，南さつま市加世田地方の市街地西側に所在し，標高22mほどのシラス台地上に位置する。また，加世田，枕崎両境に475mの蔵多山があり，ここを源に発する加世田川は加世田地方の市街地を北流し，大きく東へ蛇行しながら川辺地方に源を発する万之瀬川に合流している。また，加世田川は薩摩半島有数の河川であり，南薩平野と呼ばれる沖積平野を形成している。市の西部は，日本三大砂丘のひとつである吹上浜の南端をなし，東シナ海に面している。

南さつま市は，平成17年11月に旧加世田市，旧笠沙町，旧大浦町，旧坊津町，旧金峰町の１市４町が合併し，面積283.35k㎡，人口約40,000人（平成19年10月１日現在）で農業を産業基盤としている。また，南さつま市は，東に鹿児島市，南九州市，北に日置市，南に枕崎市に接している。

第２節　歴史的環境

南さつま市は，旧石器時代から近世に至るまで各時代の遺跡が多数発見されており，数多くの発掘調査が実施されている。ここでは周辺の地域とあわせて主な遺跡を時代別に紹介していく。

旧石器時代

ナイフ形石器や細石刃核が遺物包含層の異なった層から出土した祝原遺跡や薩摩火山灰層より下層で細石刃が出土し，それに伴う礫群１基が検出された平田尻遺跡がある。栫ノ原遺跡でも剥片尖頭器，三稜尖頭器が出土している。

縄文時代

栫ノ原遺跡は，平成４年度から５年度にかけて発掘調査が実施され，縄文時代草創期の煙道付炉穴・集石など各種の遺構とともに多くの隆帯文土器や石器（石鏃・磨製石斧・打製石斧・磨石・石皿など）が発見されている。中でも刃部が丸ノミ状で基部に突起部分をもち，刃部の形状から木材の加工に利用されたと考えられる特徴的な石器が発見された。この丸ノミ形磨製石斧は「栫ノ原型石斧」と呼称されている。このような，縄文時代草創期の調査では，南九州の縄文文化の先進性を示す貴重な発見となり，平成９年には国史跡に指定されている。

志風頭遺跡は草創期の連穴土坑や集石とともに隆帯文土器や石鏃・石皿などが発見されている。早期の円筒形土器や石鏃・石皿なども出土しているが，多量に出土している磨製石鏃は石器制作技術を知る上で貴重である。栫ノ原遺跡でも多くの前平式土器が出土し，神山遺跡では押型文土器が採集されている。加治屋遺跡では早期後半の土器が比較的多く出土している。

前期は金峰地方に阿多貝塚・上焼田遺跡・上水流遺跡などがある。万之瀬川流域の上水流遺跡では曽畑式土器が出土している。中期になると津貫の石堂遺跡で阿高式土器，並木式土器，万之瀬川流域の上水流・芝原遺跡で春日式土器が出土している。

後期には栫ノ原遺跡で岩崎上層式土器，市来式土器，石堂遺跡では出水式土器，冨が岡遺跡では御領式土器が出土している。芝原遺跡では指宿式土器・市来式土器ともに集石・伏甕・埋甕などが発見され，石鏃・石匙・磨製石斧・磨石・石皿などの石器，円盤形土製品などの土製品も多く出土している。加治屋遺跡でも多くの土器が出土している。

晩期になると，上加世田遺跡で上加世田式土器や入佐式土器が出土し，また，石鏃・石匙・磨製石斧・磨石・石皿・異形石器など多種多量の石器，更に軽石製石偶・石棒，管玉・勾玉・小玉などの石製品，土偶など軽石製品や玉類が多数出土した。

弥生時代

弥生時代では，約30ヶ所の遺跡が確認されている。早期の代表的な遺跡である高橋貝塚，甕棺が出土した下小路遺跡，中後期のＶ字状大溝環濠が検出された松木薗遺跡がある。後期になると芝原遺跡では鏡４面が出土し，安国寺式土器などを含む多量の土器の出土などからムラの形成が伺える。

古墳時代

古墳時代の遺跡では加世田小湊にある奥山古墳の六堂会箱式石棺墓が注目されている。副葬品として鉄剣・刀子・小玉・土師器が出土している。このほかにこの時代の遺跡として栫ノ原・上加世田・上水流・芝原・中小路遺跡などがある。なかでも上水流・芝原遺跡は竪穴住居跡が検出し，それに伴って土器も多数出土している。

古代

９世紀から10世紀にかけて使用されていたと思われる須恵器窯が金峰地方の中岳山麓窯跡群にある。発掘調査は行われていないが，表土から熊本県の荒尾窯に類似している遺物が採取されたことから人的・物的交流があったと考えられる。また，同地方の小中原遺跡から多くの掘立柱建物跡と「阿多」という文字が刻まれた土器などが発見されていることから，阿多郡衛の跡と考えられている。また，同地方の山野原遺跡でも多くの掘立柱建物跡と土師器・須恵器などが発見されている。祭祀に関わるとみられる遺構や，土師器焼成遺構の可能性が考えられるものも発見されており，在地の実力者にかかわる施設があった可能性が考えられている。

中世

郡衛跡と推定される小中原遺跡や中世城郭の栫ノ原遺跡（尾守城）・上ノ城跡・別府城跡，中世集落「益山村中村」の中小路遺跡，鍛冶工房跡が出土した上加世田遺跡などがある。また，中世では干河の五輪塔や堂ノ原寺遺跡周辺の宝篋印塔などの各種の石塔が数カ所で確認される。馬神遺跡ではわずかではあるが，須恵器と口禿げ白磁の碗・皿といった中世の貿易陶磁器を表面採取した。

近世以降

近世においては，当地の多くは加世田郷に含まれ，市内各地に文化財が点在している。発掘調査では，別府城跡・上ノ城遺跡・上加世田遺跡等から肥前系磁器，薩摩焼等が出土している。また，別府城においては19世紀（幕末）のオランダ製軟質磁器の出土が確認されている。

〈参考文献〉

発掘調査報告書

加世田市教育委員会　1980　『上ノ城遺跡』加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書(2)

加世田市教育委員会　1996　『上加世田遺跡』加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書(13)

加世田市教育委員会　1998　『栫ノ原遺跡』加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書(15)

加世田市教育委員会　2002　『春ノ山遺跡ほか』加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書(22)

加世田市教育委員会　2003　『祝原遺跡』加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書(23)

加世田市教育委員会　2003　『掛ノ上遺跡』加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書(24)

鹿児島県立埋蔵文化財センター　2005　『加治屋遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(82)

鹿児島県立埋蔵文化財センター　2007　『持躰松遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(120)

第２図　周辺遺跡位置

1/12500

第１表　周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地（南さつま市）	地形	時　代	遺　物　等	備　　考
1	上ノ山後	金峰町高橋上ノ山後	砂丘	弥生～中世	弥生土器・成川式・須恵器 土師器・青磁・白磁	
2	上ノ山	金峰町上ノ山	砂丘	弥生（後）		
3	草原町	金峰町宮崎	段丘	古墳		
4	高橋貝塚	金峰町高橋	台地 丘陵	弥生	弥生土器・骨角器・飾玉 石器・貝輪・獣骨・骨類	「九州考古学」18
5	天神原	金峰町宮崎天神原	台地	縄文～古墳	縄文土器（晩）・弥生土器（後） 土師器・壷形・甕形高坏脚部	
6	上焼田	金峰町宮崎上焼田	台地	旧石器～中世	細石核･縄文人骨･縄文（早～晩）･ 弥生土器・石器・獣骨　魚骨・ 貝殻・土師器	
7	堀川貝塚	金峰町宮崎	台地	縄文（中～晩）	土器片・貝殻	「鹿児島考古学」10号
8	下掘	金峰町宮崎下掘	台地	縄文～古墳	縄文土器・弥生土器・須恵器	工事中弥生完形土器発見
9	立石原	金峰町宮崎		古墳		
10	上花立	金峰町				
11	白糸原	金峰町宮崎		縄文～古墳，中世		
12	古城跡	金峰町宮崎西	台地	中世（室町）		別称「古ノ城」
13	上川原	金峰町宮崎上川原	低地	弥生，古墳	成川式	
14	万之瀬川床	加世田益山万之瀬川	川床	弥生，古墳	土器片	「鹿児島考古」12号
15	松田南	金峰町花瀬	台地	縄文(早)，古墳，中世	土器片	上加世田遺跡，平成5年範囲拡大
16	上宮寺跡	金峰町松田南	台地	中世（鎌倉）		坊津一乗院の末寺
17	持躰松	金峰町松田南	低地	縄文～中世		万之瀬川改修
18	渡畑	金峰町松田南	低地	縄文，古墳，古代，中世		万之瀬川改修
19	芝原	金峰町松田南	低地	縄文，古墳，古代，中世		万之瀬川改修
20	万之瀬川	加世田益山万之瀬川川床	河川	弥生	壷形土器・甕形土器	
21	川ノ畑	加世田益山川ノ畑	低地	弥生，古墳	弥生土器～成川式	
22	上山野	加世田益山上山野	低地	弥生，古墳	弥生土器～成川式	
23	鵜ノ塚陣跡	加世田益山宇都	丘陵	中世		
24	浜掘	加世田宮原浜掘	台地	古墳		
25	中小路	加世田益山中小路・屋郷	低地	弥生，古墳，中世 近世	成川式・松木薗式・壷型土器 貿易陶磁器	市埋文報（19）
26	内ノ田	加世田益山内ノ田	台地	旧石器，古墳，中世 近世	細石刃核・剥片他・成川式 土師器・近世陶磁器	
27	陣跡	加世田益山陣	低地	中世		
28	竹屋	加世田宮原萬一畑	台地	弥生	壷形土器	竹屋の字名はない
29	宮ノ脇・口畑	加世田宮原宮ノ脇他	台地	古墳	成川式	
30	西荒田	加世田益山西荒田	台地	縄文～古代		市埋文報（7）
31	樋ノ迫	加世田宮原樋ノ迫	丘陵	古墳	成川式	
32	小陣貝塚	加世田唐仁原小陣	低地	縄文，弥生	土器片	
33	小陣跡	加世田	低地	中世		
34	**油免・本寺**	**加世田宮原油免他**	**台地**	**古墳**	**成川式**	**本報告書**
35	佐方城跡	加世田唐仁原佐方原	低地	中世		
36	佐方	加世田唐仁原佐方原	丘陵	弥生	弥生土器	
37	佐方原・内田原	加世田唐仁原佐方原他	丘陵	古墳	成川式	
38	田武平	加世田益山田武平	台地	縄文，古墳		
39	下東掘	加世田宮原下東掘176他	台地	旧石器,縄文(草･早),古墳	細石刃・隆帯文・土器	
40	内田城跡	加世田	丘陵	中世		
41	別府城跡	加世田武田城ノ山	丘陵	弥生,古墳,中世,近世(末)	弥生土器・貿易陶磁器・炭化米	市埋文報（10）
42	杉本寺	加世田川畑杉本寺	低地	弥生	弥生壷・骨壺・弥生土器	消滅
43	上加世田	加世田川畑上加世田2715他	河岸段丘	縄文～中世	土器・石器・岩偶・石棒 石斧・ヒスイ	市埋文報（3）（4）（13） 市概報
44	椿ノ原	加世田村原椿ノ原	台地	旧石器～古墳，中世 近世	剥片尖頭器・隆帯文・土器 須恵器・土師器・砥石・石斧 岩偶・たたき石	国指定史跡 市埋文報（1）（15）（17）（20） 県埋文報（5）県概報
45	永田	加世田川畑永田	低地	古墳		
46	花牟礼城跡	南さつま市加世田川畑花牟礼	丘陵	中世		
47	二頭	加世田川畑二頭	台地	縄文(晩)，古墳，中世		
48	遠見ヶ丘	加世田川畑遠見ヶ岡	丘陵	縄文，弥生	黒川式・石斧・弥生土器	
49	みかきの	加世田川畑見掛野	丘陵	弥生	弥生土器	
50	屋地	加世田武田屋地	台地	弥生	弥生土器	
51	荒瀬原	加世田武田荒瀬	台地	弥生	弥生土器	
52	荒瀬ノ下	加世田				
53	上ノ城跡	加世田武田上ノ城	丘陵	縄文(晩)～中世(鎌倉以降)	弥生土器・壷・貿易陶磁器	市埋文報（2）
54	潮潟	加世田唐仁原塩ヶ谷	丘陵	縄文	土器片	
55	釈迦院宇都	加世田武田釈迦院宇都	台地	縄文(早･晩)，弥生，古墳	土器・土師器	
56	愛宕山	加世田武田愛宕後	低地	弥生	弥生土器	
57	柿本城跡	加世田武田中野	丘陵	中世		
58	愛宕B	加世田武田下瀬戸之上	台地	縄文（草・早・晩） 弥生，古墳	押型文・石坂式・塞ノ神式（壷 形土器）・石鏃・石匙	市埋文報（19）
59	花敷野三本松	加世田唐仁原三本松他	台地	弥生	弥生土器	
60	愛宕A	加世田武田愛宕	台地	縄文（早・前）	土器	
61	三本松	加世田武田三本松他	台地	古墳	成川式	
62	川路	加世田武田川路	台地	縄文（早），古墳		
63	後ノ迫上	加世田武田後ノ迫上	台地	古墳	成川式	
64	登ノ上	加世田武田登ノ上	台地	縄文（早）	前平式	
65	西大原	加世田武田西大原	台地	旧石器，縄文（早）	ナイフ形石器･細石刃核･土器･石鏃	市埋文報（19）
66	ヘゴノ原	加世田武田萇ノ原	台地	縄文，弥生	細石刃核･石鏃･前平式･深浦式	市埋文報（14）（19）
67	流合	加世田武田流合	台地	縄文（早）	桑ノ丸式	市埋文報（19）

第Ⅲ章　調査の概要

第１節　発掘調査の方法

平成19年７月に行われた県文化財課の事前調査を受けて，平成21年６月８日から８月７日までの約２か月間本調査を行った。調査は，対象区域全体を施工計画図外周杭Ｂ65とＢ67の２点を結ぶ線を基準に10ｍグリッドを設定して実施した。北方向から南方向にＡ・Ｂを付け，東方向から西方向に１・２・３・・・・10までを付け，Ａ－３区などと呼称することとした。平成20年度は，道路拡幅部分（歩道）の901㎡の調査を実施した。

発掘調査は，Ⅰa層を除去した後，Ⅰb層から人力で掘り下げた。また，下層確認のため，トレンチを設定して掘り下げた。

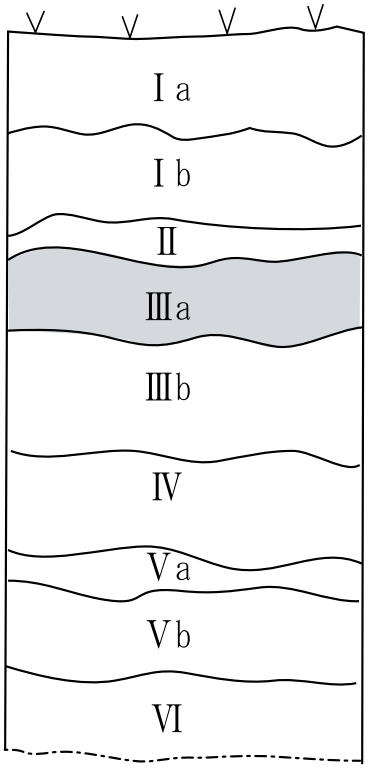
調査の結果，Ⅱ層，Ⅲa層から，縄文時代前期から近世に至るまでの遺構・遺物が発見され，特に縄文時代晩期と弥生時代中期の遺物が多数出土した。

遺物は，平板実測で取り上げ，遺構は検出状況を写真で撮影し，位置を記録してから，個別に実測を行った。

第２節　層位

油免・本寺遺跡は，旧加世田市の市街地東側標高22ｍのシラス台地にある。今回の調査範囲は国道226号の両側にありＡ区は耕作地，Ｂ区は宅地及び耕作地であった。Ａ－２～８区は，包含層であるⅢa層は残されてはいるが，Ａ－８～９区は，耕作等の削平によりほとんど上位の層が確認されなかった。

Ｂ－８，９区は，包含層のⅢa層がしっかりと残されているが，Ｂ－３～７区は，耕作や宅地造成等により包含層はほとんど残されていなかった。



Ⅰａ層　**暗褐色土層**－表土（耕作土）。

Ⅰｂ層　**暗褐色土層**－畑地開墾時の造成土。

Ⅱ　層　**黒褐色土層**－中世の遺物包含層。後世の削平によってわずかに確認される。厚さは約20㎝。

Ⅲａ層　**暗黄褐色土層**－縄文時代前期から古墳時代の包含層。アカホヤベースの腐植土。厚さは約20㎝。

Ⅲｂ層　**黄褐色火山灰層**－アカホヤ火山灰層。厚さは約40㎝。

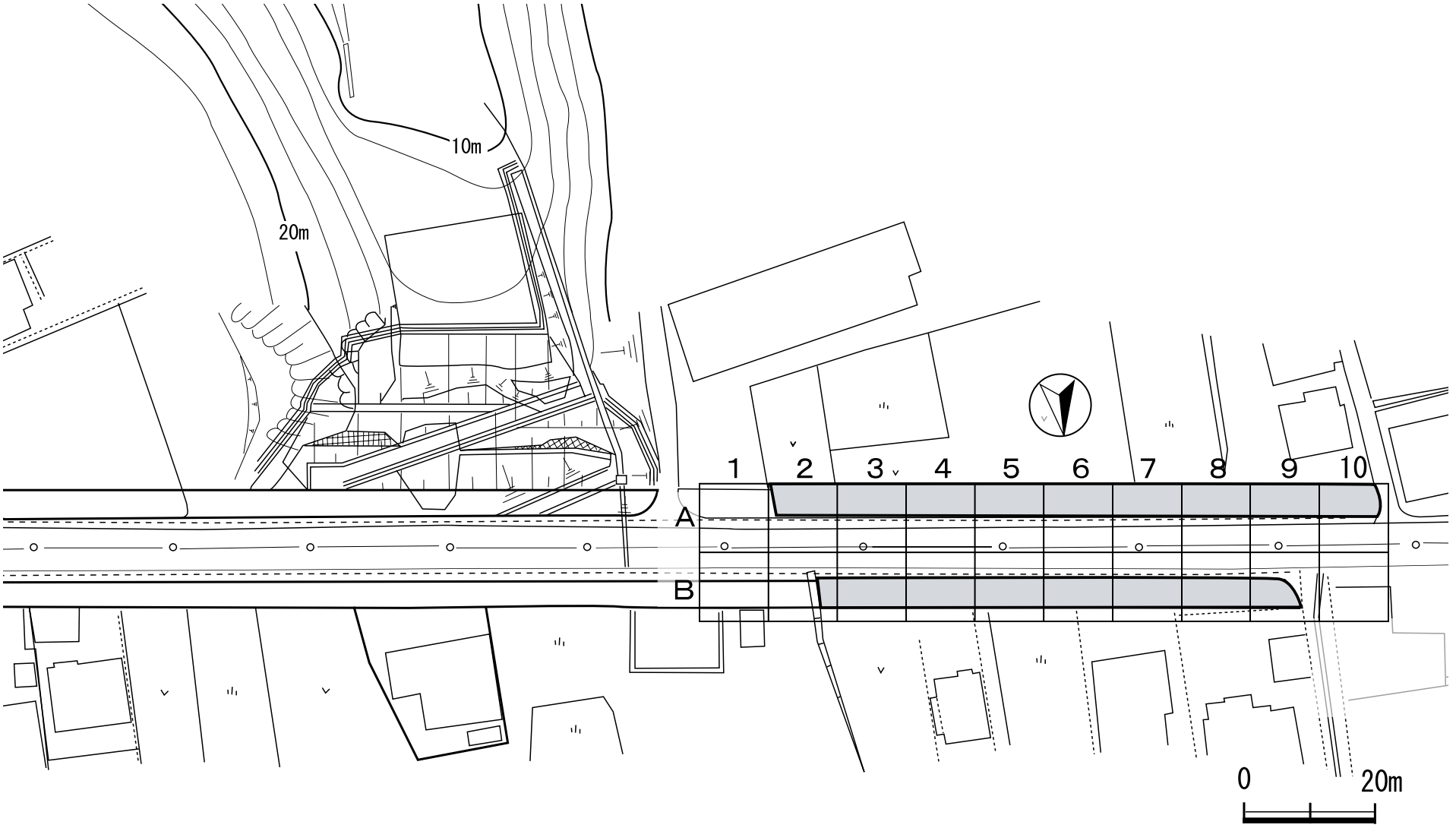
Ⅳ　層　**暗褐色土層**－薩摩火山灰に伴う黄褐色パミスがわずかにみられる。

Ⅴａ層　**にぶい赤褐色土層**－Ⅴb層よりは，粘質性が弱い。軟弱層。

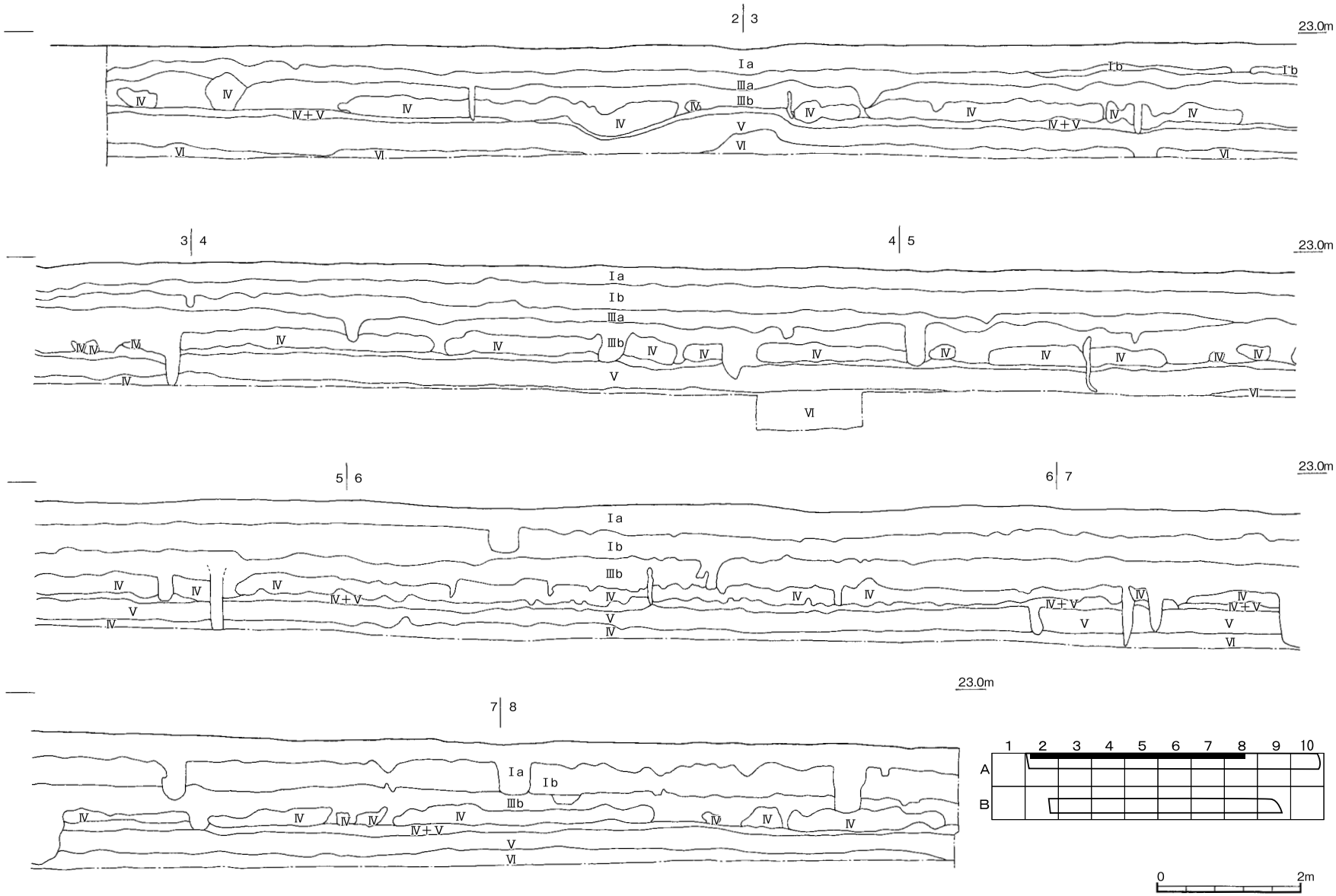
Ⅴｂ層　**にぶい赤褐色土層**－粘質性が強い。チョコ層。

Ⅵ　層　**黄褐色砂質土**－姶良カルデラ起源の入戸火砕流（シラス）の最上部で風化作用を受けている。

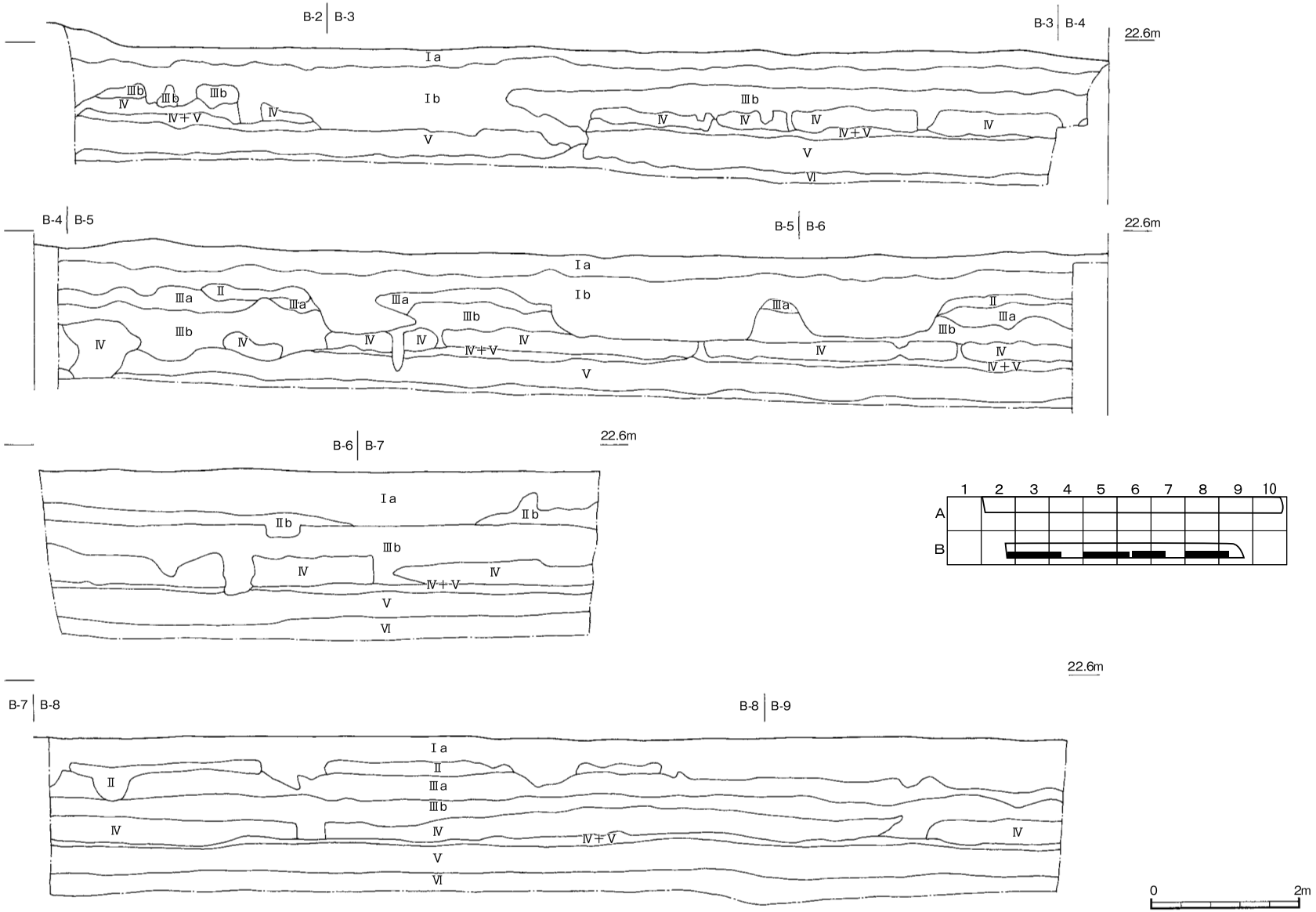
第３図　油免・本寺遺跡の基本土層図



第４図　地形図及びグリッド配置図


2 | 3
23.0m
Ia
Ib
IIIa
IIIb
V
VI
IV
IV+V
3 | 4
4 | 5
5 | 6
6 | 7
7 | 8
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10
A
B
0
2m

第５図　土層図(1)


B-2 B-3
B-3 B-4
22.6m
Ⅰa
Ⅰb
Ⅲb
Ⅳ
Ⅳ+Ⅴ
Ⅴ
Ⅵ
B-4 B-5
B-5 B-6
Ⅱ
Ⅲa
Ⅲa'
B-6 B-7
Ⅱb
B-7 B-8
B-8 B-9
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10
A
B
0 2m

第６図　土層図(2)

第Ⅳ章　調査の成果

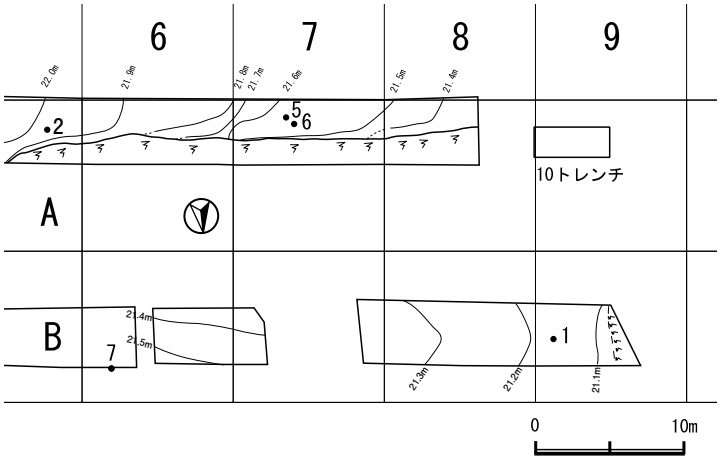
第１節　縄文時代の調査

縄文時代は，前期・後期・晩期の遺物が出土しているが，晩期が主である。

１　縄文時代前期・後期の調査

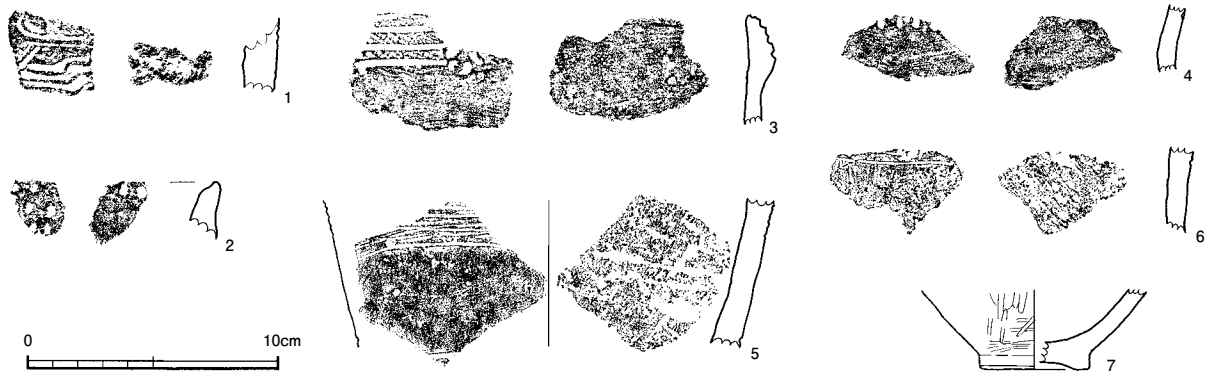
前期・後期の遺物は土器が７点出土し，すべてを図化した。

土器（第８図　１～７）



第７図　縄文時代前期・後期出土状況

１は胴部で，棒状工具による沈線文が施されている。内外面ともにナデ調整が行われている。２は口唇部と口縁部に棒状工具による刺突文が施されている。３は口唇部に１条の沈線文をもち，「くの字」状に肥厚する口縁部に棒状工具による３条の沈線文及び沈線と沈線の間に磨消縄文が斜位に施されている。また沈線上に４点一組と思われる刺突文も施されている。内外面ともにナデ調整が行われている。４は胴部で篦状工具による刺突が施されている。内外面ともにナデ調整が行われている。５は口縁部，６は胴部で棒状工具による沈線文が施され，同一個体と思われる。７は底部でわずかな上げ底状を呈する。外面ともにヘラミガキ後のナデ調整，内面はナデ調整が行われている。



第８図　縄文時代前期・後期の土器

第２表　縄文時代前期・後期の土器観察表

挿図	報告書番号	取上番号	区	X	Y	Z	層位	分類	部位	器種	調整		色調		胎土				備考
											外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	その他	
第８図	1	638	B-9	4.196	81.189	20.735	Ⅲa		胴部		沈線文ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙		○	○		
	2	46	A-5	18.043	47.696	21.960	Ⅲa	深浦	口縁部		刺突文ナデ	刺突ナデ	明赤褐	にぶい赤褐			○		
	3	表採	－	－	－	－	－	西平	口縁部		沈線文刺突文磨消縄文ナデ	ナデ	明赤褐	にぶい黄橙	○	○	○		
	4	表採	－	－	－	－	－	西平	胴部		刺突文	ナデ	明赤褐	にぶい黄橙	○	○	○		
	5	291	A-7	18.856	63.499	21.360	Ⅲa		口縁部		沈線文	ナデ	明赤褐	にぶい赤褐	○	○	○		
	6	290	A-7	18.421	64.031	21.475	Ⅲa		胴部		沈線文	ナデ	明赤褐	黄灰	○	○	○		
	7	338	B-6	2.247	51.944	21.310	Ⅲa		底部		ミガキナデ	ナデ	にぶい橙	黄灰		○	○	火山ガラス	

２　縄文時代晩期の調査

⑴　遺物

晩期は，遺構は検出されなかったが，Ⅲa層から深鉢形や浅鉢形の土器及び石鏃，石錘，磨石，敲石等の石器が出土した。

ア　土器

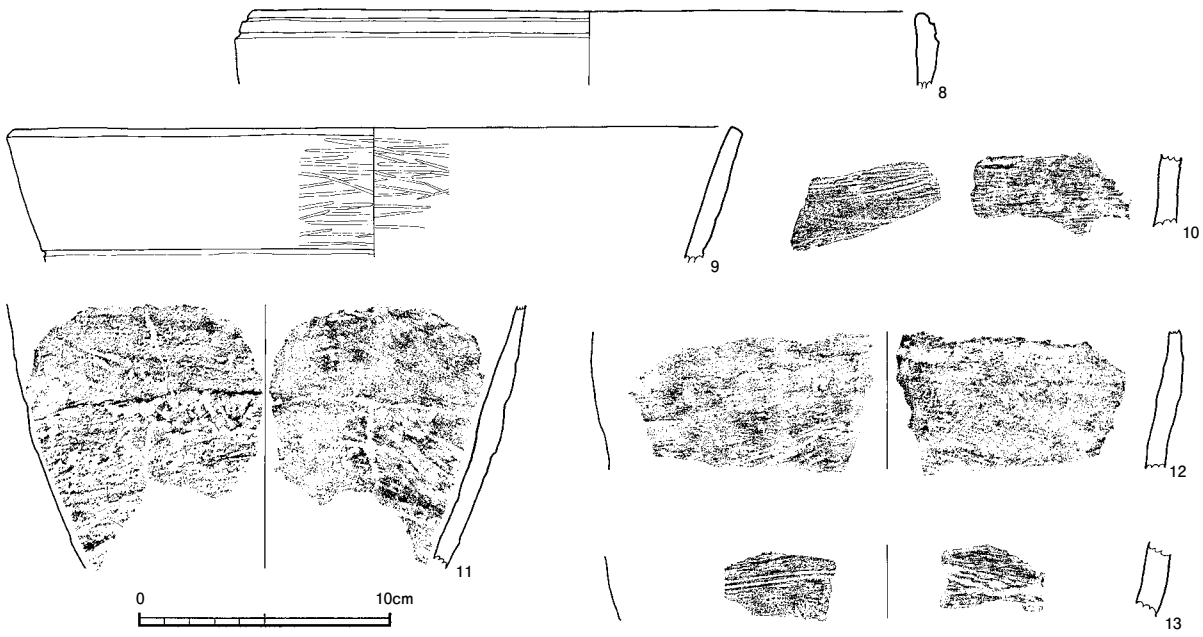
晩期の土器は，深鉢と浅鉢の形態を分類できる。概して深鉢は粗製，浅鉢は精製である。主にⅢa層から206点出土し，深鉢は17点，浅鉢は15点を図化した。

①　深鉢（第９・10図　８～24）

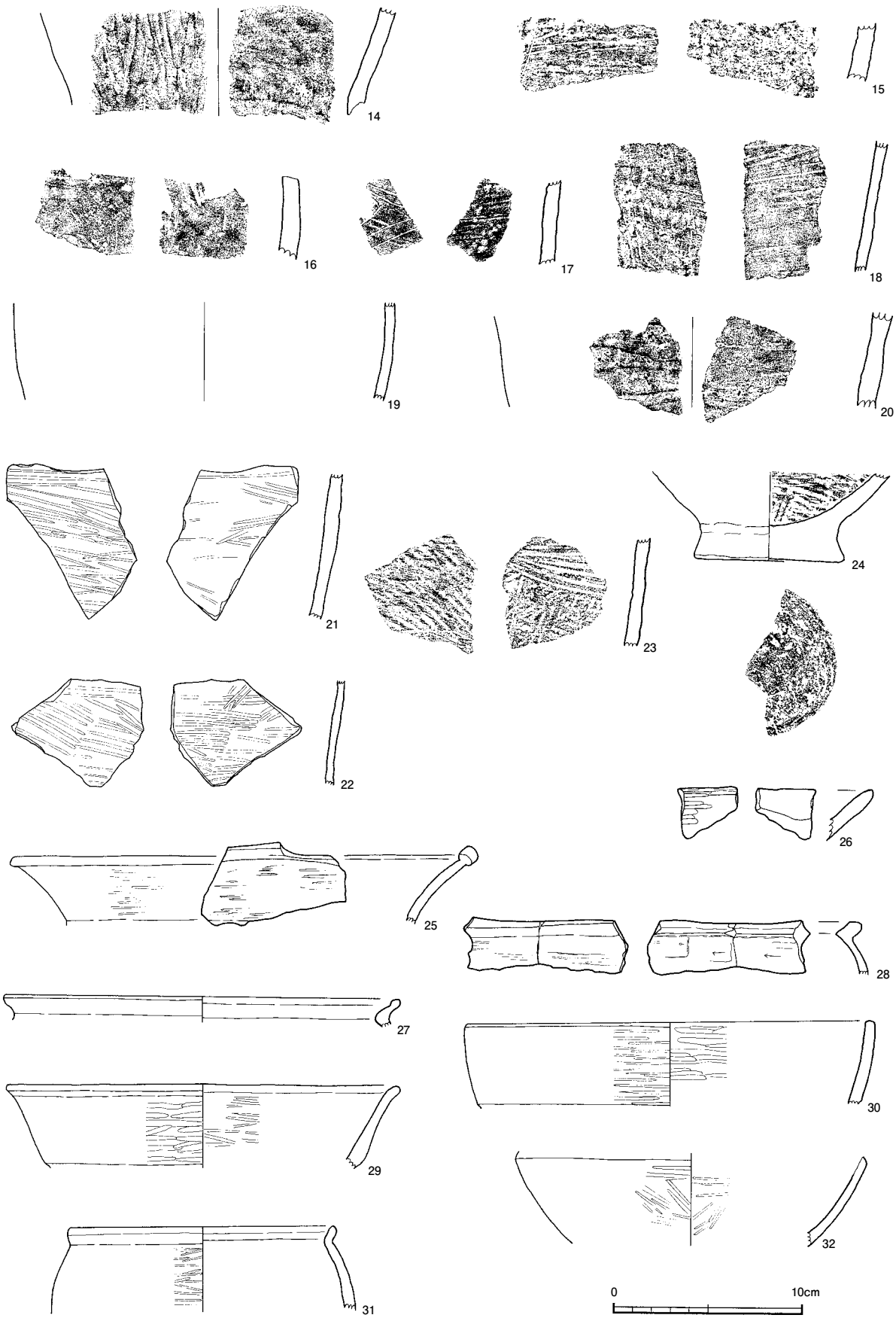
８・９は深鉢の口縁部である。８は口縁部が内湾し，口縁部外面に棒状工具による２条の沈線文が施されている。内外面ともにナデ調整が行われている。９は口縁部が外反し，口唇部がなでられ平坦になっている。内外面ともにヘラミガキ調整が行われている。10～23は胴部でほとんどが内外面ともにナデ調整が行われている。特に11・12・18・20・23は条痕調整後ナデ調整が行われている。16の上部は制作過程における粘土のつなぎ目で破損しており，径1.4㎝の補修孔をもつ。24は深鉢の底部である。器底が比較的厚く胴部と底部の境が明瞭で張り出しが大きい。内面はヘラケズリの後ナデ調整が行われている。

②　浅鉢（第10・11図　25～36）

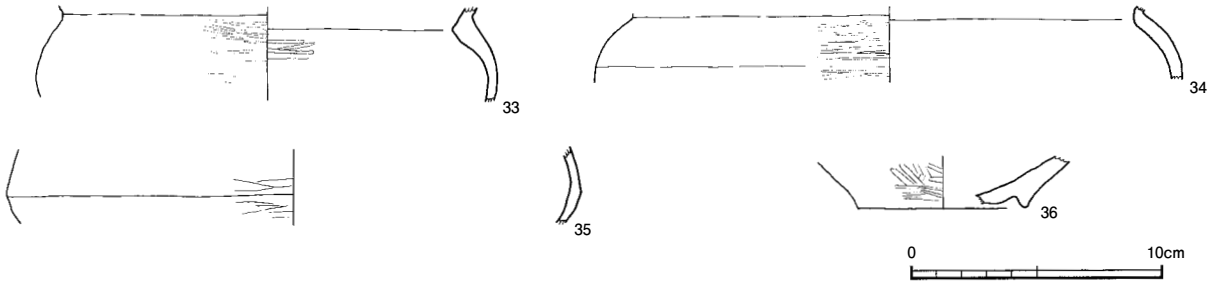
浅鉢はほとんどが内外面に丁寧なミガキを施す精製土器である。25は玉縁状の口縁を呈し，さらに口縁部にリボン状の突起を付けている。同様に27・31も玉縁状の口縁を呈し，頸部までが短く屈曲する。28も同様に口縁部から頸部までが短く屈曲する。口縁部内面に１条の沈線を施す。26・29は口縁部が外反し，口唇部が丸みを帯びている。30・32はボール状に立ち上がるもので，小型の鉢型土器とも考えられる。31は胴部が丸みを帯び，口径よりも胴部径が大きい。36は浅鉢の底部である。高台状で，器底が比較的薄く，張り出しが小さい。



第９図　縄文時代晩期の土器⑴



第10図　縄文時代晩期の土器(2)



第11図　縄文時代晩期の土器(3)

第３表　縄文時代晩期の土器観察表

挿図	報告書番号	取上番号	区	X	Y	Z	層位	分類	部位	器種	調整		色調		胎土				備考
											外面	内面	外面	内面	石英	長　石	角閃石	その他	
第9図	8	ミゾ03	－	－	－	－	－	上加世田	口縁部		ナデ	ナデ	浅黄	浅黄		○	○	金雲母	
	9	表採	－	－	－	－	－		口縁部	深鉢	ヘラミガキ	ヘラミガキ	にぶい赤褐	にぶい赤褐		○	○		
	10	173	B-8	5.467	78.679	21.245	Ⅲa		胴部	深鉢	条痕文 ナデ	ナデ	にぶい黄	浅黄	○	○	○		
	11	116	B-8	4.191	73.220	21.330	Ⅲa		胴部	深鉢	条痕文 ナデ	条痕文 ナデ	にぶい黄	にぶい黄	○	○	○	火山ガラス	
		123		2.879	73.422	21.355													
		234		4.097	73.235	21.315													
		372		4.048	73.329	21.305													
		472		4.604	73.565	21.255													
		621		4.687	72.110	21.000													
	12	121	B-8	3.857	73.980	21.310	Ⅲa		胴部	深鉢	条痕文 ナデ	条痕文 ナデ	にぶい黄	にぶい黄	○	○	○	火山ガラス	
	13	547	B-9	5.544	80.963	21.045	Ⅲa		胴部	深鉢	ヘラケズリ 後ナデ	ヘラケズリ 後ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄		○	○	金雲母	
第10図	14	300	A-8	18.730	74.919	21.160	Ⅲa		胴部	深鉢	ヘラ工具 ナデ	ヘラ工具 ナデ	にぶい黄橙	暗灰黄		○	○		接合痕
	15	18	A-4	18.270	31.387	22.290	Ⅲa		胴部	深鉢	ヘラケズリ 後ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○		
	16	23	A-4	18.890	36.859	22.155	Ⅲa		胴部	深鉢	ナデ	ナデ	明赤褐	明赤褐	○	○	○	火山ガラス	補修孔
	17	5	A-6	18.941	52.936	21.885	Ⅲa		胴部	深鉢	沈線 ナデ	ナデ	暗灰黄	暗灰黄		○	○	金雲母	
	18	表採	－	－	－	－	－		胴部	深鉢	条痕文 ナデ	条痕文 ナデ	にぶい黄	にぶい黄			○	火山ガラス	
	19	432	B-9	2.554	80.384	21.120	Ⅲa		胴部	浅鉢	ヘラケズリ	ヘラケズリ ナデ	黒褐	にぶい黄橙		○	○		
		434		2.588	80.499	21.110													
	20	410	B-8	2.491	78.419	21.190	Ⅲa		胴部	深鉢	条痕文 ナデ	条痕文 ナデ	黒褐	黄灰		○	○		
	21	98	A-3	19.288	23.820	22.395	Ⅲa		胴部	深鉢	条痕文 ナデ	ナデ	にぶい黄橙	橙		○	○	火山ガラス 金雲母	
	22	395	B-8	3.715	77.158	21.200	Ⅲa		胴部	深鉢	ヘラミガキ	ヘラミガキ	灰黄	灰黄		○	○	火山ガラス 金雲母	
	23	445	B-9	3.850	82.763	21.125	Ⅲa		胴部	深鉢	条痕文 ナデ	条痕文 ナデ	黒褐	黄灰		○	○		
	24	484	B-8	5.216	76.161	21.135	Ⅲa		底部	深鉢	ナデ	ヘラ工具 ナデ	浅黄	灰黄		○	○	火山ガラス	
	25	95	A-4	19.586	31.043	22.250	Ⅲa		口縁部	浅鉢	ミガキ	ミガキ	暗灰黄	暗灰黄		○	○	火山ガラス	玉縁
	26	31	A-6	17.885	55.803	21.800	Ⅲa		口縁部	浅鉢	ミガキ	ヘラケズリ ミガキ	黒褐	黄褐	○	○	○		
	27	表採	－	－	－	－	－		口縁部	浅鉢	ミガキ	ミガキ	黒褐	黒褐	○				玉縁
	28	404	B-8	3.542	77.977	21.240	Ⅲa		口縁部	浅鉢	ミガキ	ミガキ	黒褐	黒褐	○	○			
		411	B-8	2.920	78.590	21.140	Ⅲa		口縁部	浅鉢									
	29	表採	－	－	－	－	－		口縁部	浅鉢	ミガキ	ミガキ	黒	黒	○		○		
	30	214	B-9	3.689	83.578	21.200	Ⅲa		口縁部	浅鉢	ヘラケズリ ミガキ	ミガキ	黄灰	黒褐			○		
	31	表採	－	－	－	－	－		口縁部	浅鉢	ミガキ	ミガキ	黒褐	黒褐			○		玉縁
	32	表採	－	－	－	－	－		口縁部	浅鉢	ミガキ	ヘラケズリ ミガキ	黄灰	黄褐			○		
第11図	33	362	B-8	3.892	72.359	21.240	Ⅲa		胴部	浅鉢	ヘラケズリ ミガキ	ヘラケズリ ミガキ	黄灰	にぶい黄	○	○	○		
	34	565	B-8	4.818	71.180	21.135	Ⅲa		胴部	浅鉢	ヘラケズリ ミガキ	ヘラケズリ ナデ	黄灰	黄灰		○	○		
	35	414	B-8	2.672	79.459	21.140	Ⅲa		胴部	浅鉢	ヘラケズリ ミガキ	ヘラケズリ ミガキ	にぶい黄	にぶい黄	○	○	○		
	36	292	A-7	19.025	66.683	21.500	Ⅲa		底部	浅鉢	ヘラミガキ	ヘラケズリ ミガキ	にぶい褐	にぶい黄	○	○	○		

イ　石器・石製品

晩期の石器は，石鏃，抉入石器，石核，石錘，磨石，敲石，凹石が出土した。

①　石鏃（第12図　37 ～ 41）

石鏃は打製のもので５点出土した。素材は安山岩が２点，黒曜石（上牛鼻産類似），頁岩，チャートが各１点である。37～40は入念な交互剥離により調整されている。41は両面からの剥離がなされるものの定まった形はなく，しかも厚みをもつため，加工途中のものであると考えられる。

②　抉入石器（第12図　42）

長さ２㎝幅，幅1.1㎝の長方形をした剥片の側辺を一部加工し，抉りとしては２か所確認されるが，明瞭な抉りの作出までは至っていない。腰岳産類似の黒曜石を使用している。

③　石核（第12図　43）

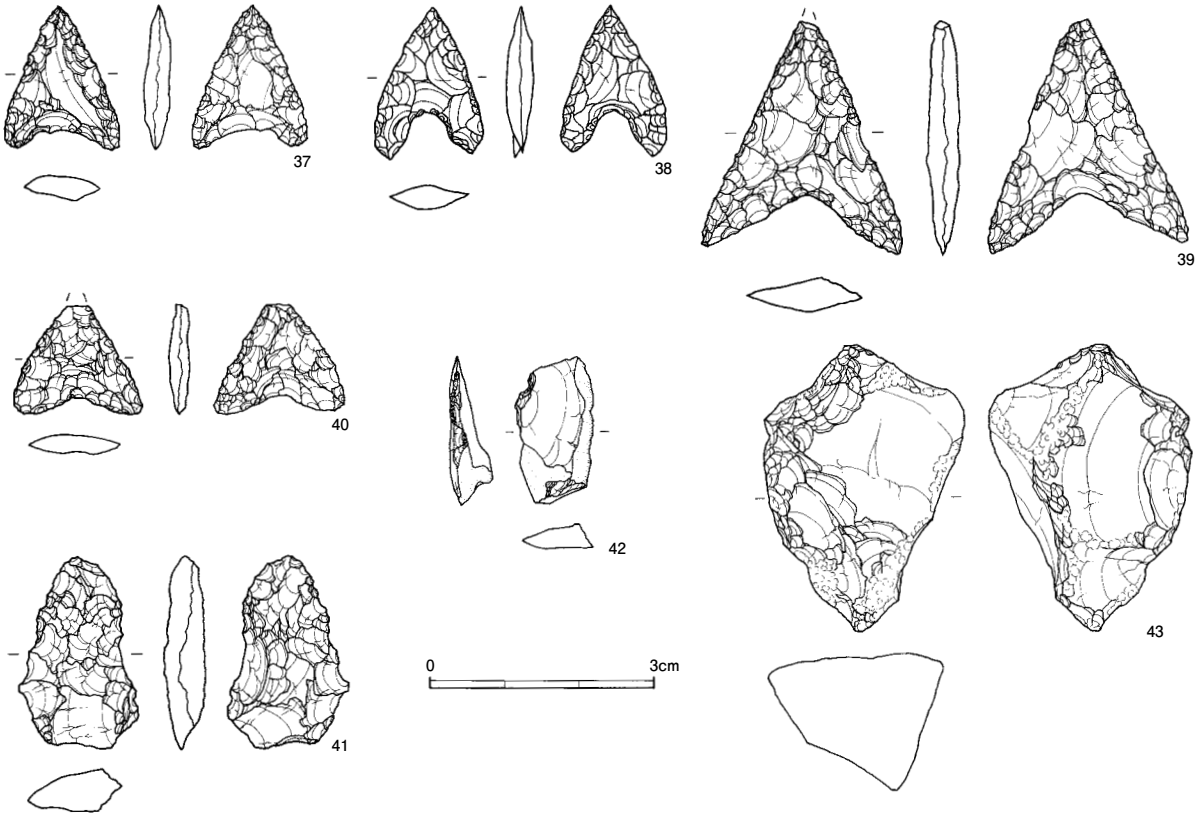
玉随を使用し，平坦な自然面を打点にして周辺から中心に向かって剥ぐ求心的な剥片剥離を行っている。

④　石錘（第13図　44）

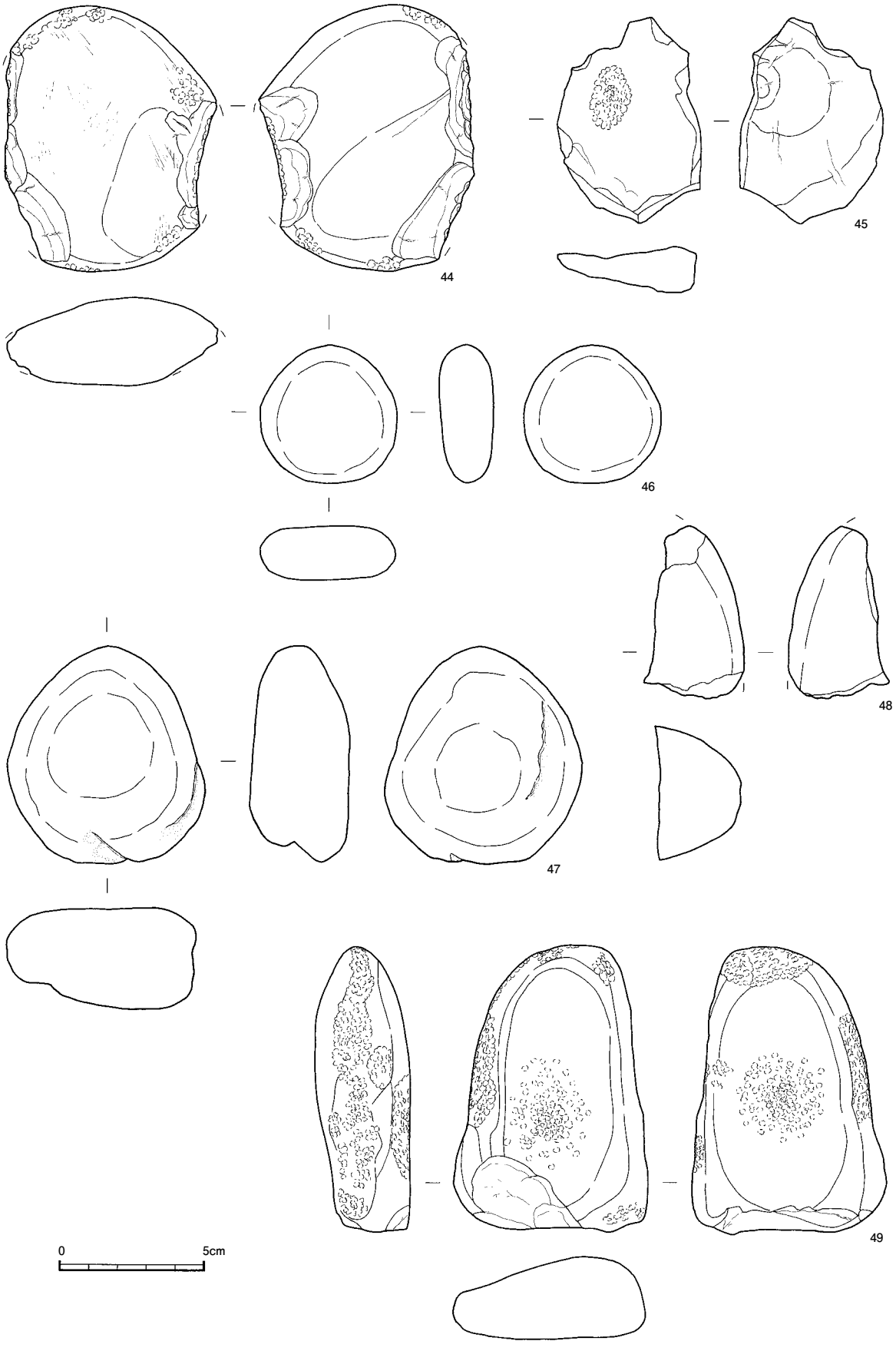
砂岩を使用した石錘が１点出土した。ほぼ円形の偏平礫を表と裏の両方からの粗い剥離と敲打により抉りを調整している。

⑤　磨石・凹石・敲石（第13・14図　45 ～ 52）

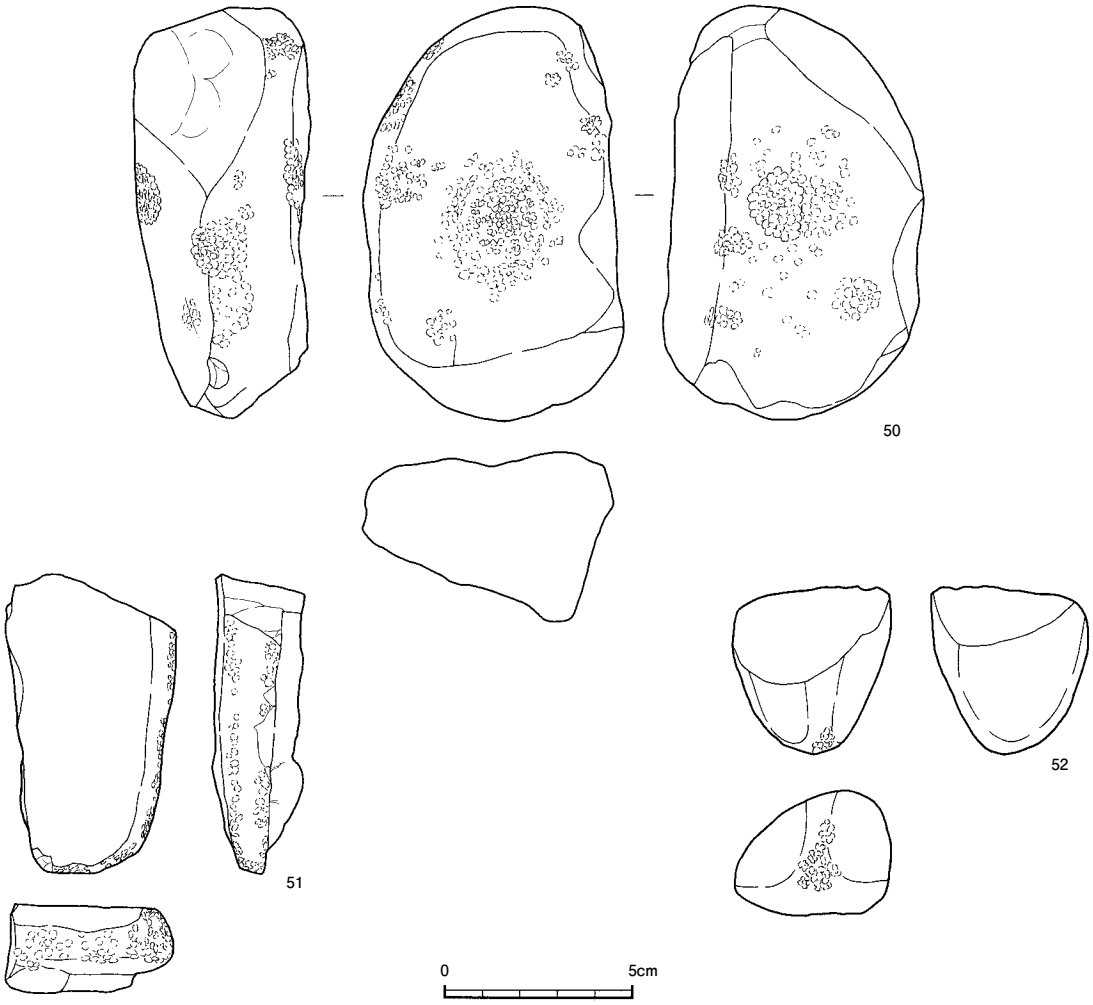
磨石は３点出土した。46・47は砂岩，48は花崗岩の円礫を用いた磨石である。凹石は３点出土した。平面の中央部に敲打痕をもつものを凹石とした。49・50は側面にも敲打痕をもち敲石としての機能ももつ。敲石は２点出土した。砂岩を用いた敲石である。51は側面全体に，52は大きく破損しているが先端部に使用痕が認められる。



第12図　縄文時代晩期の石器(1)



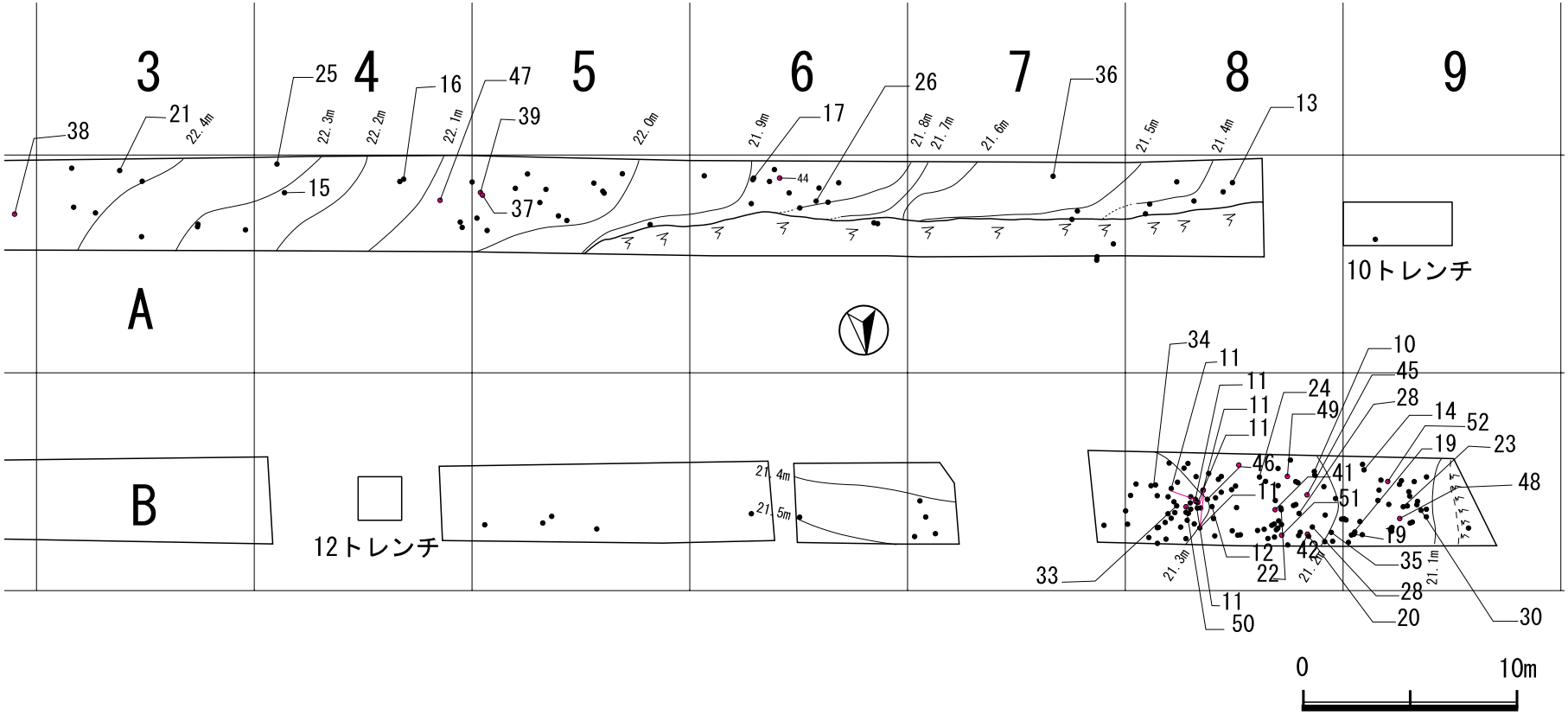
第13図　縄文時代晩期の石器(2)



第14図　縄文時代晩期の石器(3)

第４表　縄文時代晩期　石器観察表

挿図	報告書番　号	取上番号	区	X	Y	Z	層位	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)
第12図	37	552	A-5	552	18.158	21.830	Ⅲa	石鏃	頁岩	1.9	1.6	0.37	0.74
	38	659	A-2	659	17.286	21.985	Ⅲa	石鏃	黒曜石	2.0	1.5	0.35	0.77
	39	87	A-5	87	18.279	22.070	Ⅲa	石鏃	安山岩	3.1	2.7	0.46	2.11
	40	—	—	11T	—	—	Ⅲa	石鏃	安山岩	1.5	1.8	0.30	0.58
	41	394	B-8	394	3.716	21.185	Ⅲa	石鏃	チャート	2.6	1.6	0.55	1.92
	42	314	B-8	314	2.593	21.230	Ⅲa	抉入石器	黒曜石	2.0	1.1	0.55	0.75
	43	—	—	一括	—	—	—	石核	玉随	3.8	2.7	1.95	17.64
第13図	44	7	A-6	7	18.944	21.920	Ⅲa	石錘	砂岩	9.3	7.4	3.00	305
	45	149	B-8	149	4.396	21.340	Ⅱ	凹石	砂岩	7.2	5.0	1.60	53
	46	119	B-8	119	4.191	21.320	Ⅲa	磨石	砂岩	4.9	4.8	1.90	66
	47	271	A-4	271	17.922	21.750	Ⅲa	磨石	砂岩	7.6	6.9	3.50	235
	48	210	B-9	210	3.310	21.170	Ⅲa	磨石	花崗岩	6.0	3.5	4.60	105
	49	147	B-8	147	5.244	21.320	Ⅱ	凹石	砂岩	9.9	6.8	3.30	300
第14図	50	109	B-8	109	3.852	21.355	Ⅲa	凹石	砂岩	11.0	7.0	4.70	450
	51	159	B-8	159	2.543	21.260	Ⅲa	敲石	砂岩	8.0	4.6	3.40	113
	52	226	B-9	226	5.009	21.215	Ⅲa	敲石	砂岩	4.5	4.2	3.35	57



第15図　縄文時代晩期遺物出土分布図

第２節　弥生時代の調査

弥生時代の遺物は調査区の北西に当たるＢ－８，９区を中心にⅢａ層から出土している。時期は弥生時代中期前半の遺物が中心であり，土器については口縁部から大きく３つに分類した。また石器はＢ－８区から磨製石鏃が１点出土した。弥生土器は293点出土しその内28点を図化した。弥生時代は本遺跡の主体となる時代の１つである。この時代の遺構は確認されなかった。

遺　物

１　土器

Ⅰ類（第16図　53～58）

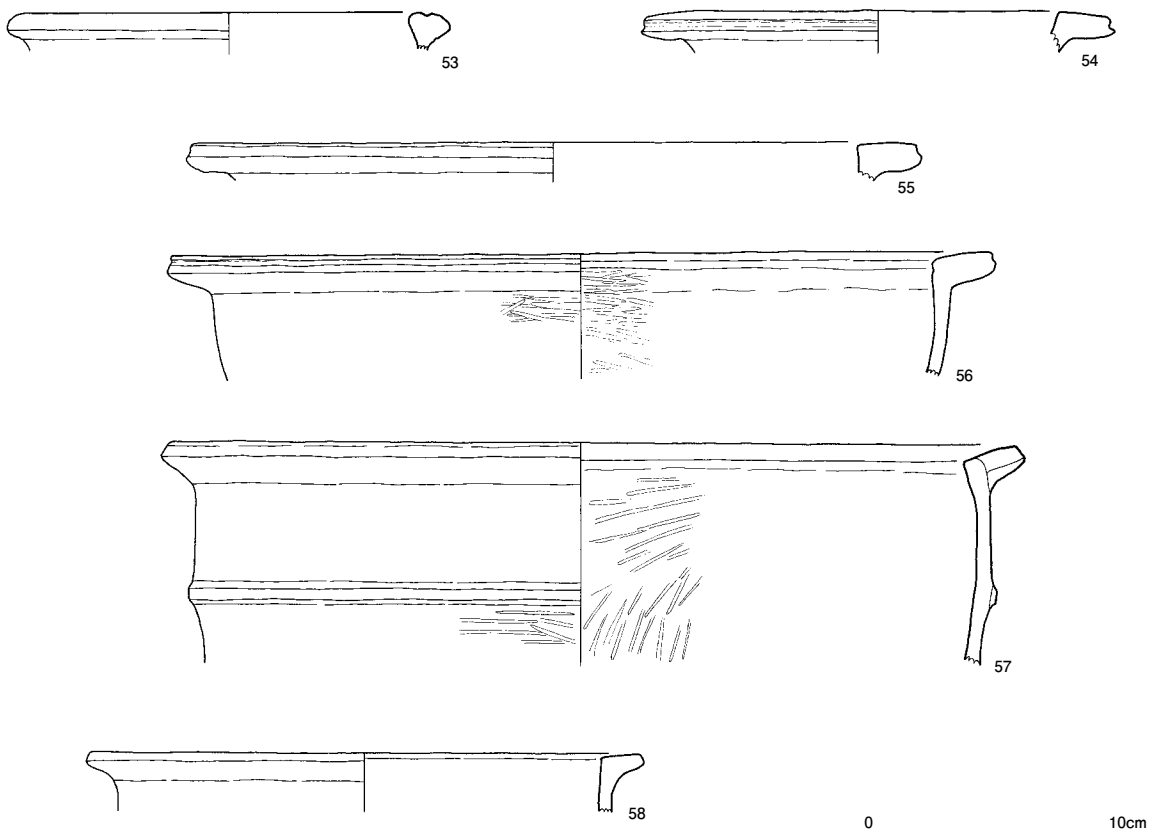
口縁部の断面が方形または台形に近い。また，口縁部が「逆Ｌ字」状に外反するものである。53は口唇部が短く外反し，上端にわずかな凹みを有する。54，55は直角に近く外反し，口唇部にわずかな凹みを有する。56，57は口縁部がやや上方に外反するもので，56は口唇部に凹みを有する。57は胴部上位に断面方形状の突帯を廻らす。

Ⅱ類（第17図　59～63）

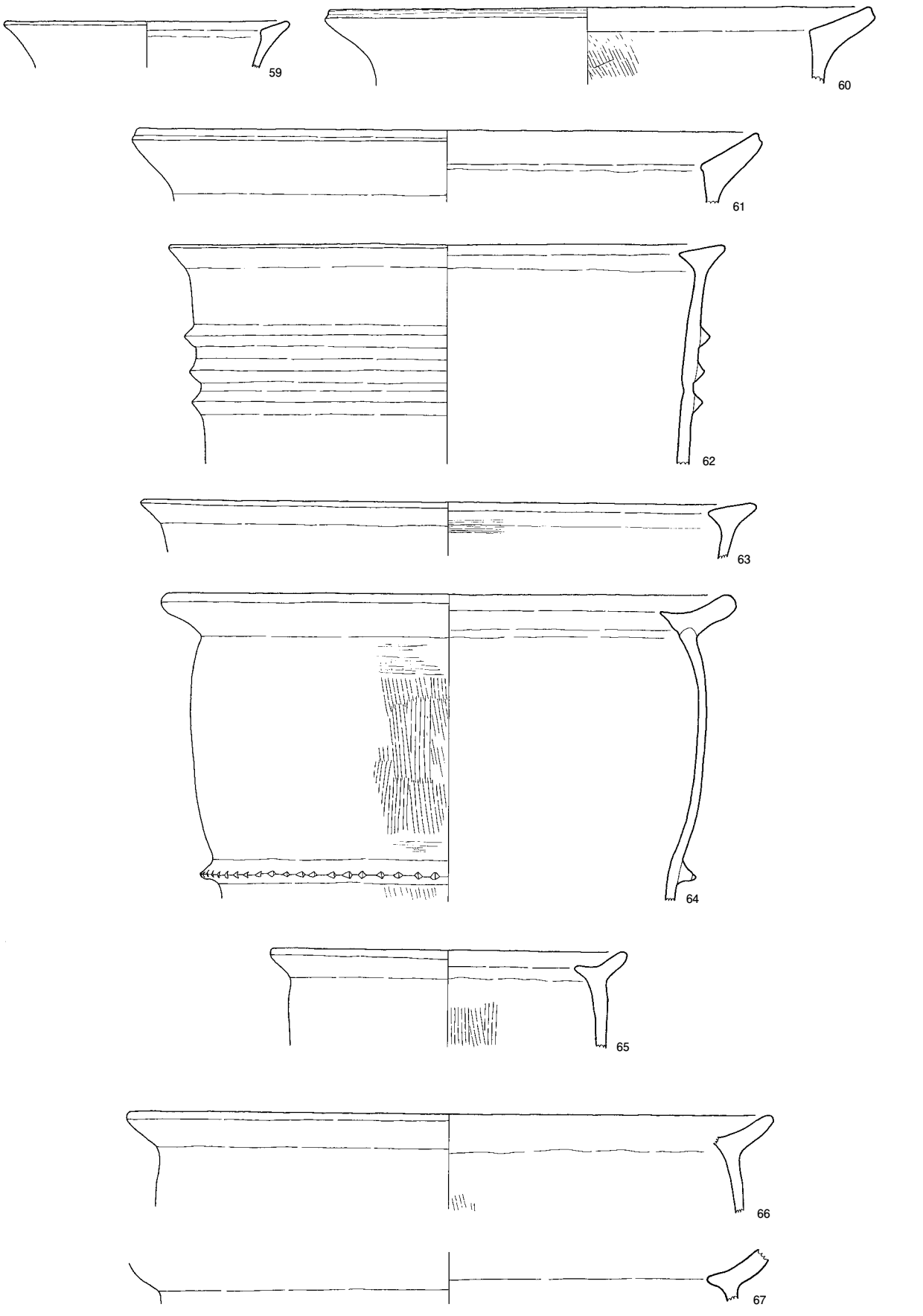
厚く短めの口縁部が「くの字」状に外反し，上面はほぼ平坦である。62，63は口縁部内側が尖り気味に張り出し，62は口縁部直下に断面三角状の突帯を３条廻らす。

Ⅲ類（第17図　64～67）

口縁部が「くの字」状に外反し，口縁内面に突起を有する。口縁上面はしゃくれ気味になる。64，65の胴部は丁寧なハケメで施され，64は刻目突帯が１条廻らされている。66の口径は35㎝で本遺跡で出土した弥生時代の土器の中で最も大きい。



第16図　弥生時代の土器(1)



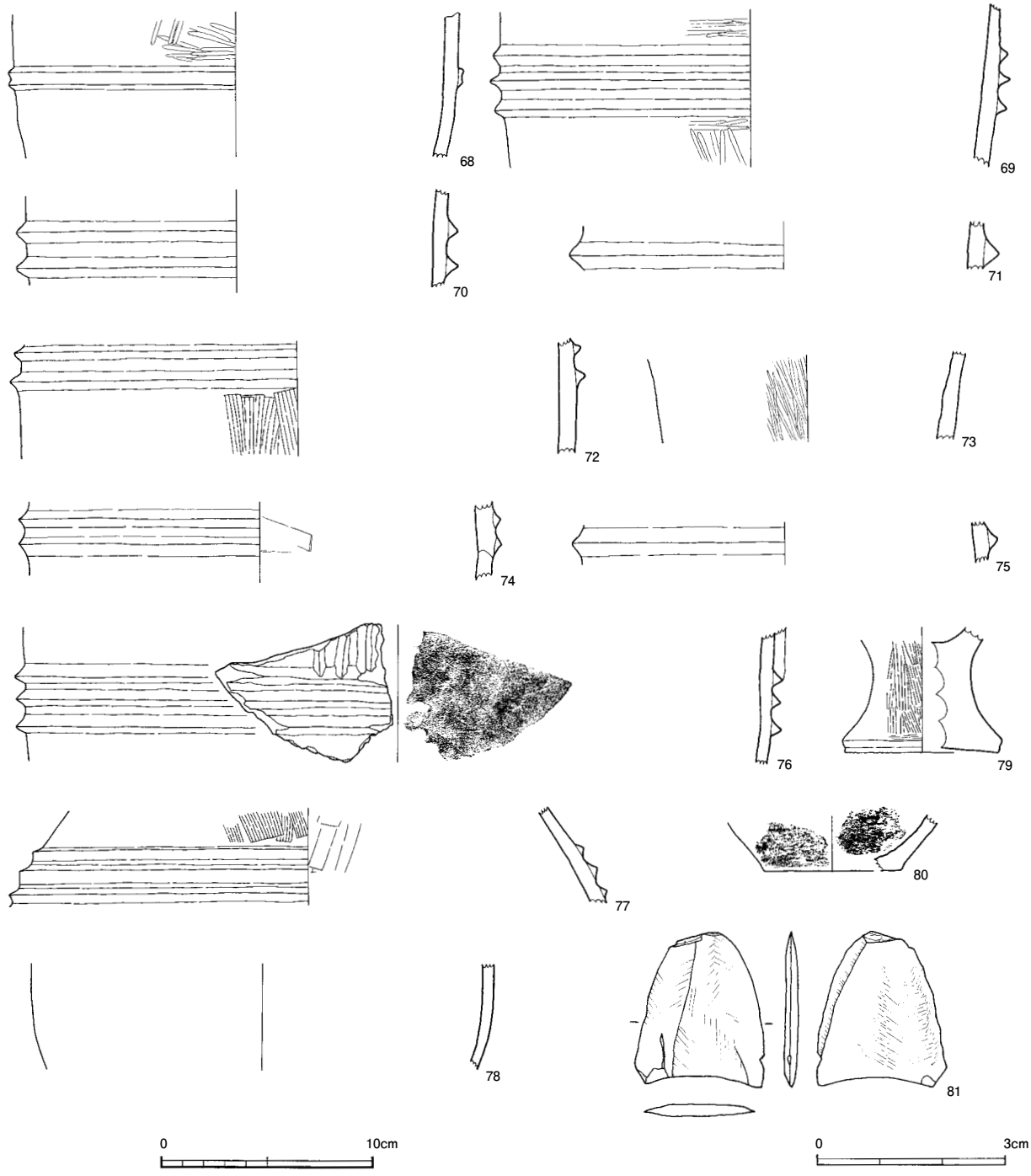
第17図　弥生時代の土器(2)

胴部（第18図　68～78）

68～76は甕の胴部である。68は，断面M字状の突帯が１条廻らしⅠ類土器の57と同一個体と思われる。69～72，74，75は１～３条の断面三角状の突帯を廻らす。76は横位の三角突帯を３条廻らし，その縦位の三角突帯を貼り付けるものである。77，78は壺の胴部である。77の外面はハケメの調整が施され断面三角形の突帯が廻らされている。

底部（第18図　79，80）

79は充実した脚台で甕の底部である。外面はハケメ調整が丁寧に施されている。80は壺の平底の底部である。



第18図　弥生時代の土器・石器(3)

２　石器

磨製石鏃（第18図　81）

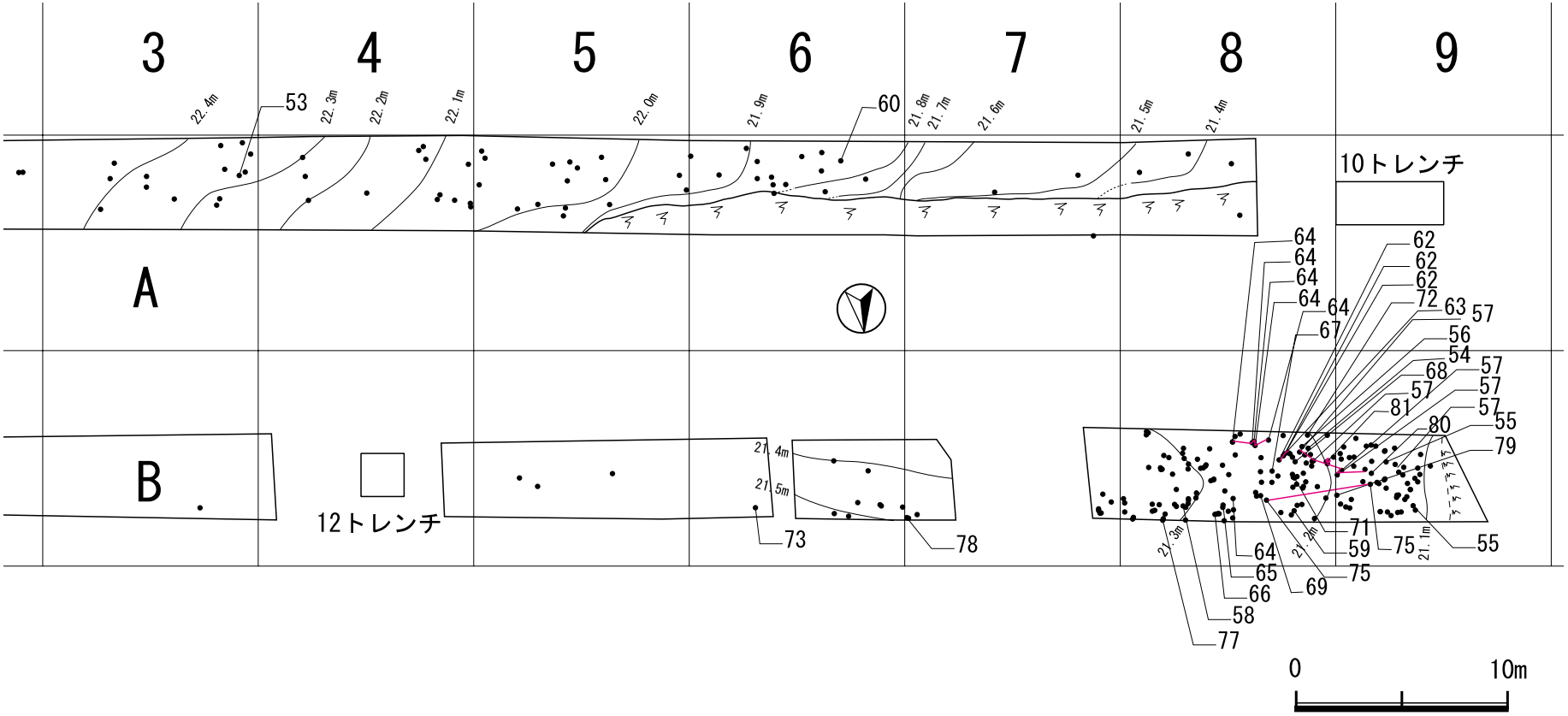
弥生時代の土器が集中して出土したＢ－８区から出土した。赤い頁岩を使用し，長さ2.5㎝，幅2.1㎝，厚さ２㎜で全面に明瞭な研磨痕がみられ，基部は浅い抉りが施されている。

第５表　弥生時代の土器観察表

挿図	報告書番号	取上番号	区	X	Y	Z	層位	分類	部位	器種	調整		色調		胎土				備考
											外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	その他	
第16図	53	257	A-3	18.126	29.118	22.185	Ⅲa	Ⅰ	口縁部	甕	ミガキ	ミガキ	黒褐	黒褐		○			
	54	232	B-8	5.469	78.719	21.240	Ⅲa	Ⅰ	口縁部	甕	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○		
	55	208	B-9	2.803	83.591	21.210	Ⅱ	Ⅰ	口縁部	甕	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○		
		221		4.834	82.337	21.210	Ⅲa												
	56	146	B-8	5.544	78.434	21.310	Ⅲa	Ⅰ	口縁部	甕	ヘラミガキ ナデ	ヘラミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○		
	57	144	B-8	5.292	78.322	21.260	Ⅲa	Ⅰ	口縁部	甕	ヘラミガキ	ヘラミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙		○	○	金雲母	
		231	B-8	4.891	78.966	21.240	Ⅲa												
		323	B-9	4.230	80.069	21.210	Ⅲa												
		425	B-9	4.439	80.271	21.145	Ⅲa												
		453	B-9	4.490	81.356	21.090	Ⅲa												
	58	310	B-8	2.791	72.914	21.325	Ⅲa	Ⅰ	口縁部	甕	ナデ	ナデ	にぶい黄	浅黄	○	○	○	火山ガラス	
第17図	59	408	B-8	2.567	78.069	21.200	Ⅲa	Ⅱ	口縁部	甕	ナデ	ナデ	橙	橙	○	○	○	火山ガラス	
	60	25	A-6	18.807	57.032	21.710	Ⅲa	Ⅱ	口縁部	甕	ナデ	ハケメ	灰黄褐	にぶい褐	○	○	○	金雲母	
	61	表採	－	－	－	－	－	Ⅱ	口縁部	甕	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○	金雲母	
	62	139	B-8	5.115	77.565	21.275	Ⅲa	Ⅱ	口縁部	甕	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄褐	○	○	○		
		320	B-8	5.249	77.817	21.240	Ⅲa	Ⅱ											
		399	B-8	4.929	77.372	21.245	Ⅲa	Ⅱ											
		表採	－	－	－	－	－	Ⅱ											
	63	138	B-8	5.209	77.635	21.265	Ⅲa	Ⅱ	口縁部	甕	ナデ	ナデ ハケメ	にぶい黄橙	にぶい黄褐	○	○	○		
	64	319	B-8	5.598	76.259	21.310	Ⅲa	Ⅲ	口縁部	甕	ハケメ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○		
		518		5.762	75.211	21.245													
		521		5.725	76.121	21.260													
		522		5.787	76.208	21.270													
		593		3.138	75.237	20.890													
		596		5.848	76.878	20.840													
	65	378	B-8	2.833	74.770	21.230	Ⅲa	Ⅲ	口縁部	甕	ナデ	ナデ ハケメ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○	○		
	66	311	B-8	2.402	74.394	21.270	Ⅲa	Ⅲ	口縁部	甕	ナデ	ナデ	淡黄	淡黄	○	○	○		
	67	148	B-8	4.410	77.047	21.355	Ⅱ	Ⅲ	口縁部	甕	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙		○	○		
第18図	68	143	B-8	4.844	78.116	21.290	Ⅲa	Ⅱ	胴部	甕	ヘラミガキ ナデ	ナデ	にぶい黄	にぶい黄橙	○	○	○	火山ガラス	
	69	153	B-8	3.268	76.513	21.285	Ⅲa	突帯文	胴部	甕	ミガキ	ナデ	にぶい黄	にぶい黄	○	○	○		
	70	表採	－	－	－	－	－	突帯文	胴部	甕	ナデ	ナデ	にぶい黄褐	にぶい褐	○	○	○		
	71	403	B-8	4.092	78.084	21.235	Ⅲa	突帯文	胴部	甕	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○		
	72	527	B-8	6.078	78.690	21.070	Ⅲa	突帯文	胴部	甕	ハケメ	ナデ	にぶい黄	灰黄褐	○	○	○		
	73	339	B-6	2.710	53.073	21.340	Ⅲa	－	胴部	甕	ヘラミガキ	ナデ	赤褐	にぶい赤褐		○	○		
	74	ミゾ02	－	－	－	－	－	突帯文	胴部	甕	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい褐			○		
	75	197	B-9	3.797	81.602	21.250	Ⅱ	突帯文	胴部	甕	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○		
		391	B-8	3.061	76.786	21.115	Ⅲa	突帯文	胴部	甕									
	76	表採	－	－	－	－	－	工字状突帯	胴部	甕	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙		○	○		
	77	507	B-8	2.129	71.972	21.275	Ⅲa	突帯文	胴部	壺	ハケメ	工具ナデ ナデ	暗灰黄	浅黄	○	○	○		
	78	347	B-7	2.250	60.093	21.475	Ⅲa	－	胴部	壺	ナデ	ナデ	明黄褐	明赤褐	○	○	○		
	79	194	B-9	3.290	80.051	21.120	Ⅲa	Ⅲ	底部	甕	ハケメ	－	にぶい橙	－	○	○	○	金雲母	
	80	492	B-9	4.306	81.654	21.230	Ⅲa	－	底部	壺	ナデ	ナデ	褐	暗褐	○	○	○		

第６表　弥生時代　石器観察表

挿図	報告書番号	取上番号	区	X	Y	Z	層位	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)
第18図	81	424	B-8	424	4.896	21.165	Ⅲa	磨製石鏃	頁岩	2.5	2.1	0.20	1.6



第19図　弥生時代遺物出土分布図

第３節　古墳時代の調査

古墳時代は溝状遺構が１条検出され，Ⅲa層から土器が66点出土し19点を図化した。

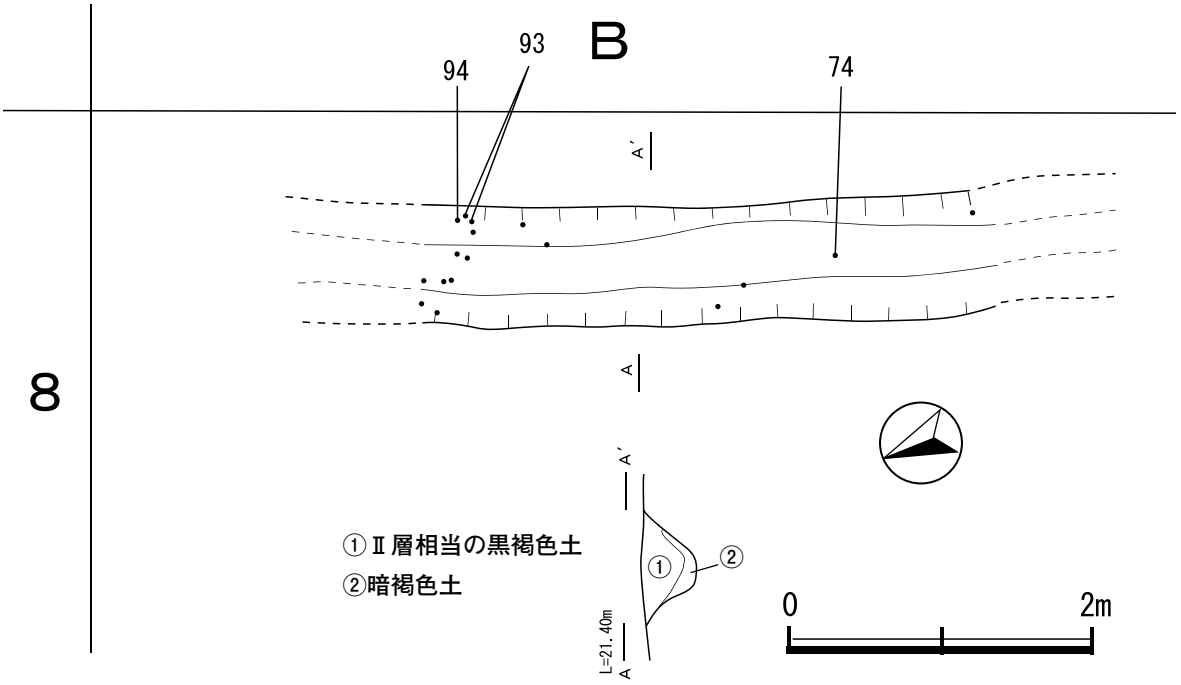
１　遺　構

溝状遺構（第20図）

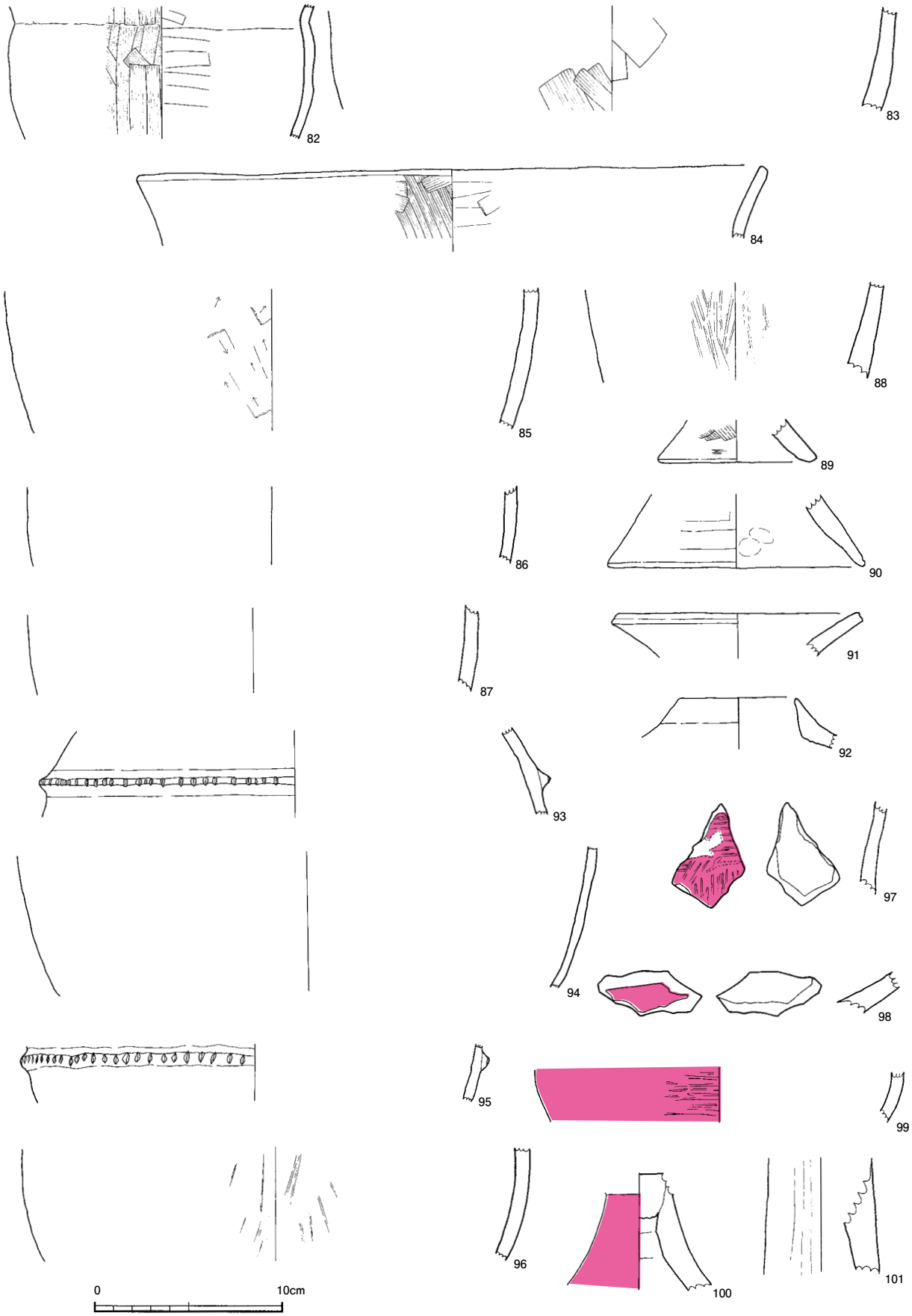
Ｂ－８区，Ⅲa層上面より南北方向に伸びる溝状遺構が検出された。幅約80cm，長さ約3.7m，深さが20～40㎝で北側が浅く南側が深くなっていることから，北から南に向けて流れていたものと想定される。遺構内から縄文時代晩期のものが２点，弥生時代中期のものが16点，古墳時代が１点，計19点出土し時代が混在している。このことから古墳時代以降に使用されたものと推定できる。なお，遺構内遺物については３点〔74（第18図）・93・94（第21図）〕を一般遺物の中で図化した。

２　遺　物（第21図　82～101）

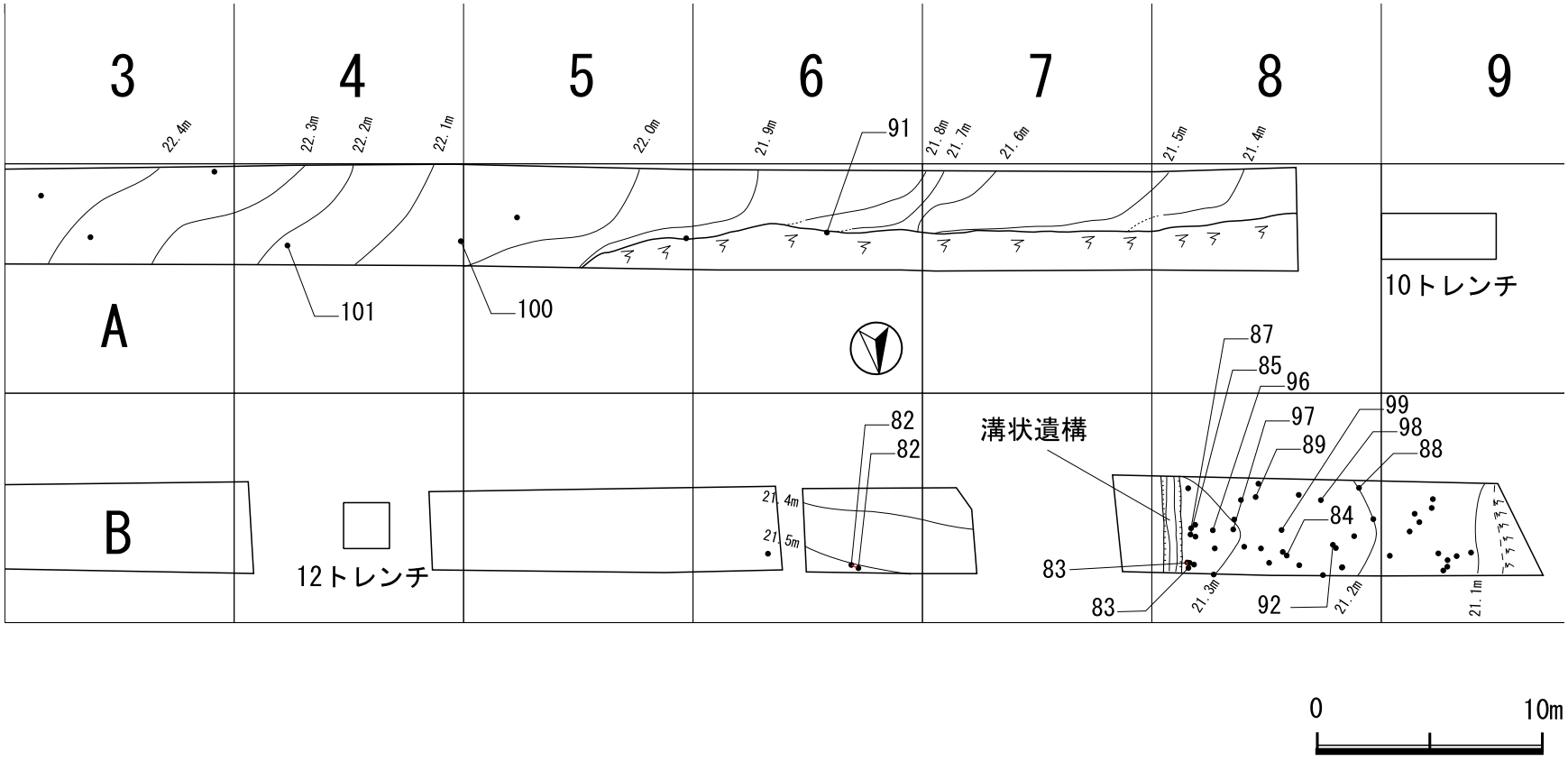
古墳時代の遺物もⅢa層から出土した。82，83は胴部で口縁部は外反する甕である。外内面ともハケメ調整が施されている。84は口径が34㎝で口縁部が外反する甕である。内面はハケメで丁寧に調整されている。85～88は甕の胴部である。85の外面は工具ナデで，86，87はナデ調整が施されている。89，90は中空の脚台で甕の底部である。91は壺形土器である。92は頸部が短く，無頸壺の範疇に入れたい。93～96は壺の胴部である。93，95は刻目突帯文が胴部上位にあり，内外面ともにナデによる調整が施されている。94は，胴部下位であり，内外面ともにナデによる調整である。胎土や調整・焼成などから93と94は，同一個体と思われ，Ｂ－８区から検出された溝状遺構から出土した。97～99は丹塗りの坩形土器である。100，101は高坏の脚部であり100は丹塗りである。



第20図　溝状遺構



第21図　古墳時代の土器



第22図　古墳時代遺物出土分布図

第７表　古墳時代の土器観察表

挿図	報告書番号	取上番号	区	X	Y	Z	層位	分類	部位	器種	調整		色調		胎土				備考
											外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	その他	
第21図	82	343	B-6	2.514	56.901	21.530	Ⅲa	中津野	胴部		ハケメ	ハケメ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	－	○	○		
		344	B-6	2.374	57.209	21.500	Ⅲa												
	83	112	B-8	2.383	71.594	21.370	Ⅲa	中津野	胴部		ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	橙	にぶい黄橙		○	○	火山ガラス	
		506	B-8	2.605	71.646	21.250													
	84	385	B-8	2.924	75.880	21.245	Ⅲa	－	口縁部		ハケメ	ハケメ後ナデ	黒褐	橙		○			
	85	104	B-8	3.841	71.685	21.355	Ⅲa	－	胴部		工具ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙		○	○		
	86	表採	－	－	－	－	－	－	胴部		ナデ	ナデ	にぶい橙	黄灰	○	○	○	火山ガラス	
	87	103	B-8	4.113	71.710	21.380	Ⅲa	－	胴部		ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙		○	○		
	88	528	B-8	5.873	79.030	21.155	Ⅲa	－	胴部		ヘラミガキ	ヘラミガキ	にぶい橙	にぶい橙			○		
	89	128	B-8	5.475	74.523	21.275	Ⅲa		脚部	－	ハケメ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙		○	○		
	90	表採	－	－	－	－	－	－	脚		ハケメ	ハケメ後ナデ	にぶい褐	暗灰黄	○	○	○		
	91	286	A-6	17.006	55.837	21.550	Ⅲa	－	口縁部		ナデ	ナデ	橙	にぶい黄橙	○	○	○		
	92	405	B-8	3.392	77.892	21.195	Ⅲa		口縁部		ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙		○	○	金雲母	
	93	ミゾ07	－	－	－	－	－	刻目突帯文	胴部		ナデ	ナデ	オリーブ黒	にぶい黄橙		○	○	金雲母砂粒	-
		ミゾ10																	
	94	ミゾ08	－	－	－	－	－	－	胴部		ナデ	ナデ	にぶい橙	浅黄		○	○	金雲母砂粒	
		ミゾ09																	
	96	108	B-8	4.025	72.657	21.350	Ⅲa	－	胴部		ハケメ後ナデミガキ	ナデミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙		○	○	火山ガラス	
	97	120	B-8	4.063	73.547	21.350	Ⅲa	－	胴部	坩	ヘラミガキ	ナデ	赤	にぶい黄橙		○	○	金雲母	丹塗り
	98	137	B-8	5.340	77.367	21.270	Ⅲa	－	胴部	坩	ヘラミガキ	ヘラミガキ	赤	赤	○	○	○	火山ガラス	丹塗り
	99	132	B-8	4.038	75.654	21.340	Ⅲa	－	胴部	坩	ハケメ	ナデ	赤	にぶい黄橙		○	○		丹塗り
	100	78	A-4	16.628	39.881	22.110	Ⅰb		脚部	高坏	ナデ	ナデ	赤	にぶい黄橙			○		丹塗り
	101	268	A-4	16.439	32.323	21.760	Ⅳ		脚部	高坏	ヘラミガキ	ナデ	灰白	灰白		○	○		

第４節　古代・中世の調査

Ⅲa層上面で掘立柱建物跡が１棟検出され，２基の柱穴の底から古銭が発見された。他の遺物は土師器，須恵器，青磁，陶器が出土している。また，その掘立柱建物跡の周辺からは，５基のピット（Ｐ６～Ｐ10）も検出されたが，遺物は出土しなかった。

１　遺　構

掘立柱建物跡（第23，24図）

この掘立柱建物跡はＡ－３区のⅢa層上面で検出された。主軸はほぼ南北方向であるが，調査区外に伸びている可能性もあるため正確な大きさは定かではない。柱穴の規模は平均で，長径が約70㎝，短径が約50㎝，深さは約110㎝である。Ｐ１とＰ２の底からは宋元通宝が１枚ずつ出土した。また糸切り底の土師器Ⅲ類がＰ４から１点，Ｐ５から５点出土した。柱穴の底から出土した宋元通宝は中世に生産されていることからこの掘立柱建物跡はそれ以降のものと考えられる。また，掘立柱建物跡の周辺から５基のピットが検出されたが，埋土状況や配列などから掘立柱建物跡とは関係ないものと判断した。

２　遺　物

古代須恵器（第26図　102）

102は古代の須恵器の甕の胴部である。内面，外面とも平行叩きがみられる。

土師器（第26図　103～105）

103～105は土師器の皿の底部で底径が，103は9.6㎝ 104は8.7㎝である。底部の糸切りの痕跡が明瞭な浅い皿である。106は内黒土師器の高坏の胴部である。

紡錘車（第26図　106）

106は紡錘車である。半分欠損する土師器の皿の底部を転用したものである。片面には糸切り痕が観察できる。

青磁（第26図　107～112）

107～112は青磁の碗，皿である。107は同安窯系の碗で内面には櫛掻き文が施されている。109は龍泉窯の青磁の碗で12世紀のものである。108，110は青磁の皿で14世紀のものである。

陶器（第26図　113，114）

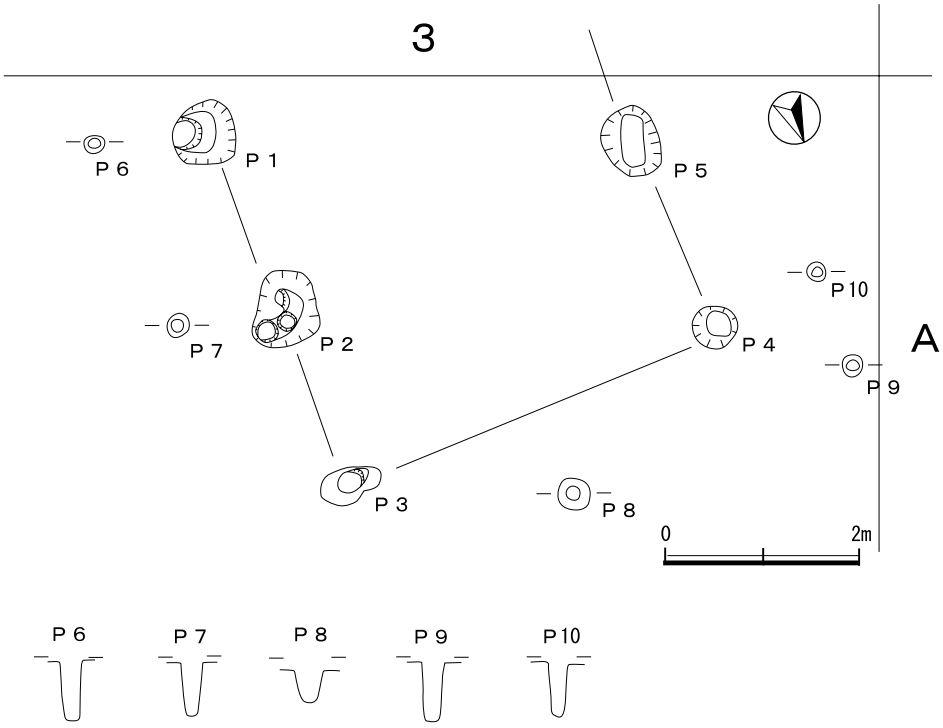
113は灰釉陶器であるが，産地は不明である。114は内面にクシ状の条線がみられる陶器の擂鉢である。

中世須恵器（第26図　115）

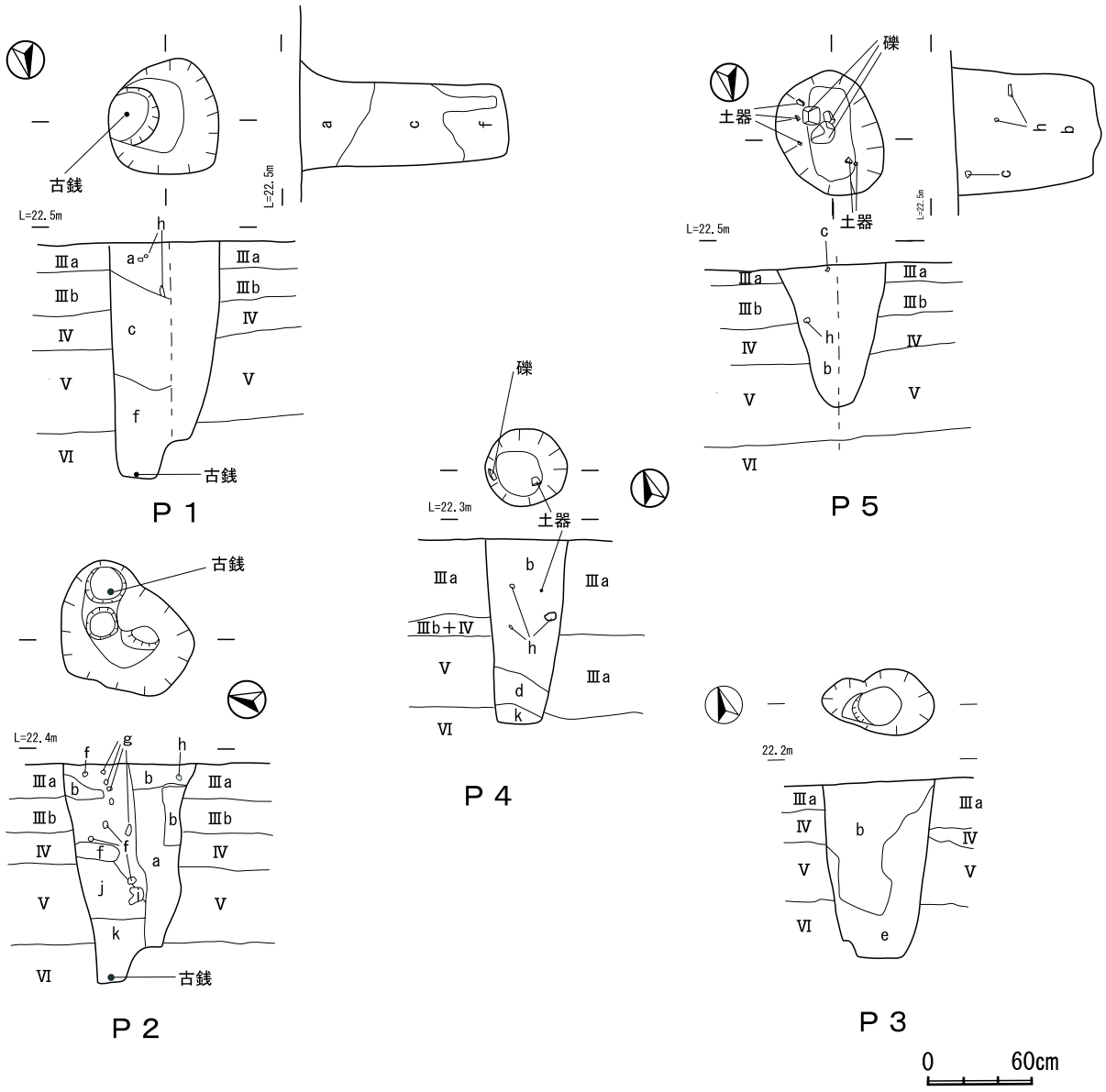
115は樺万丈窯の須恵器の擂鉢である。外面は格子目叩きがみられ，内面に横方向のハケ目調整が施してある。13世紀後半のものである。

瓦質土器（第26図　116，117）

116，117は瓦質土器である。116は擂鉢，117は捏鉢の口縁部であり，内面には条痕が平行に施してある。



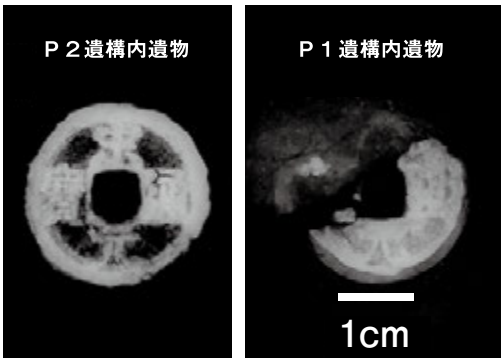
第23図　掘立柱建物跡とピット群の位置図



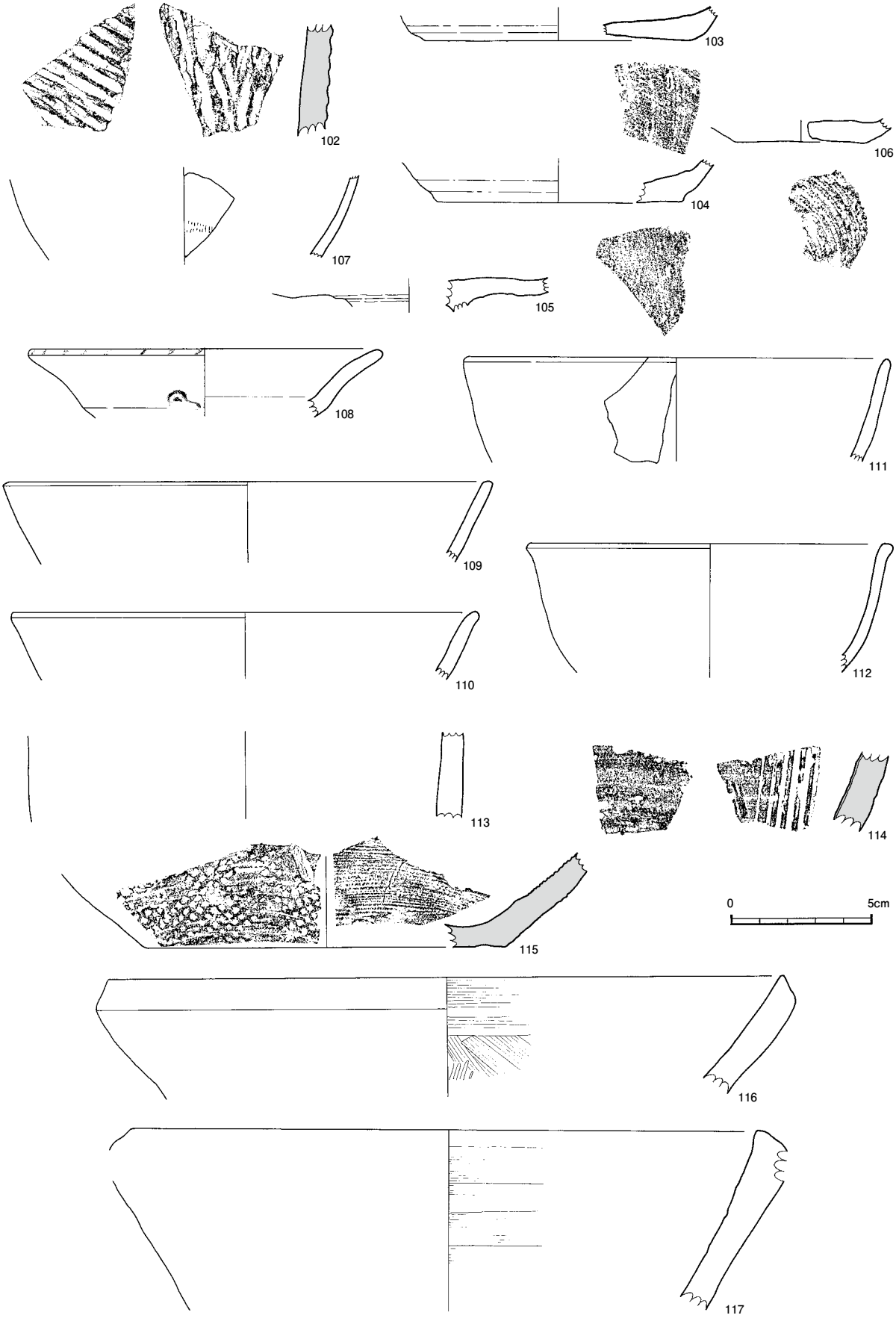
第24図　掘立柱建物跡柱穴断面

第８表　柱穴埋土状況観察表

a	暗褐色土とⅡ層相当の黒褐色土の混ざり。軟質土。
b	Ⅱ層相当の黒褐色土で一部アカホヤの混ざり。軟質土。
c	Ⅱ層相当の黒褐色土。
d	aに若干のアカホヤの混ざり。
e	黄褐色土。bにやや多めのアカホヤの混ざり。
f	Ⅴ層相当の粘土のブロック。
g	Ⅳ層相当の黒褐色土のブロック。
h	Ⅲ層相当のアカホヤのブロック。
i	Ⅵ層相当の明黄褐色土の混ざり。軟質土。
j	にぶい黄褐色土。Ⅱ層相当の黒褐色土とアカホヤの混ざり。軟質土。
k	Ⅳ層相当の黒褐色土と明黄褐色土の混ざり。軟質土。



第25図　古銭Ｘ写真



第26図　古代・中世の遺物

第９表　古代・中世の遺物観察表（須恵器・土師器）

挿図番号	遺物番号	種類	器種	出土区	層位遺構	部位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調 外面	色調 内面	焼成	調整 外面	調整 内面	備考
第26図	102	須恵器	－	A－5	－	胴部	－	－	－	にぶい褐	灰褐	良	平行叩き	平行叩き	
	103	土師器	皿	A－3	P６	底部	－	9.6	－	淡橙	褐灰	良	回転ナデ	ナデ	糸切り
	104	土師器	皿	A－3	P６	底部	－	8.7	－	淡橙	褐灰	良	回転ナデ	ナデ	糸切り
	105	土師器	高坏	B－8	Ⅱ	胴部	－	－	－	にぶい黄橙	褐灰	良	回転ナデ	回転ナデ	内黒
	106	紡錘車	－	A－3	P３	底部	－	4	－	橙	橙	良	ナデ	ナデ	土師器の皿底部転用
	114	須恵器	－	A－8	表採	胴部	－	－	－	にぶい赤褐	にぶい赤褐	良	ナデ	ナデ	
	115	須恵器	擂鉢	A－3	表採	底部	－	13	－	灰	灰	良	格子叩き	ハケメ	
	116	土師器	擂鉢	A－8	表採	口縁部	36.4	－	－	橙	橙	良	条痕	条痕	備前系
	117	須恵器	捏鉢	A－7	表採	口縁部	33.8	－	－	灰	灰	良	条痕	条痕	

第10表　古代・中世の遺物観察表（陶磁器）

挿図番号	遺物番号	種類	器種	部位	出土区	層位遺構	胎土	釉(薬)	露胎	焼成	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備考
第26図	107	青磁	碗	胴部	－	表採	浅黄	暗オリーブ	無	良	－	－	－	同安窯
	108	青磁	皿	口縁部	A－8	表採	灰白	オリーブ灰	無	良	12.5	－	－	
	109	青磁	碗	口縁部	－	表採	灰白	オリーブ灰	無	良	17.4	－	－	
	110	青磁	碗	口縁部	A－5	表採	灰白	オリーブ灰	無	良	16.6	－	－	
	111	青磁	碗	口縁部	－	表採	灰白	オリーブ灰	無	良	15	－	－	龍泉窯
	112	青磁	碗	口縁部	－	表採	オリーブ灰	オリーブ灰	無	良	12.8	－	－	
	113	磁器	－	胴部	－	表採	灰白	浅黄	外面	良	－	－	－	

第５節　近世の調査

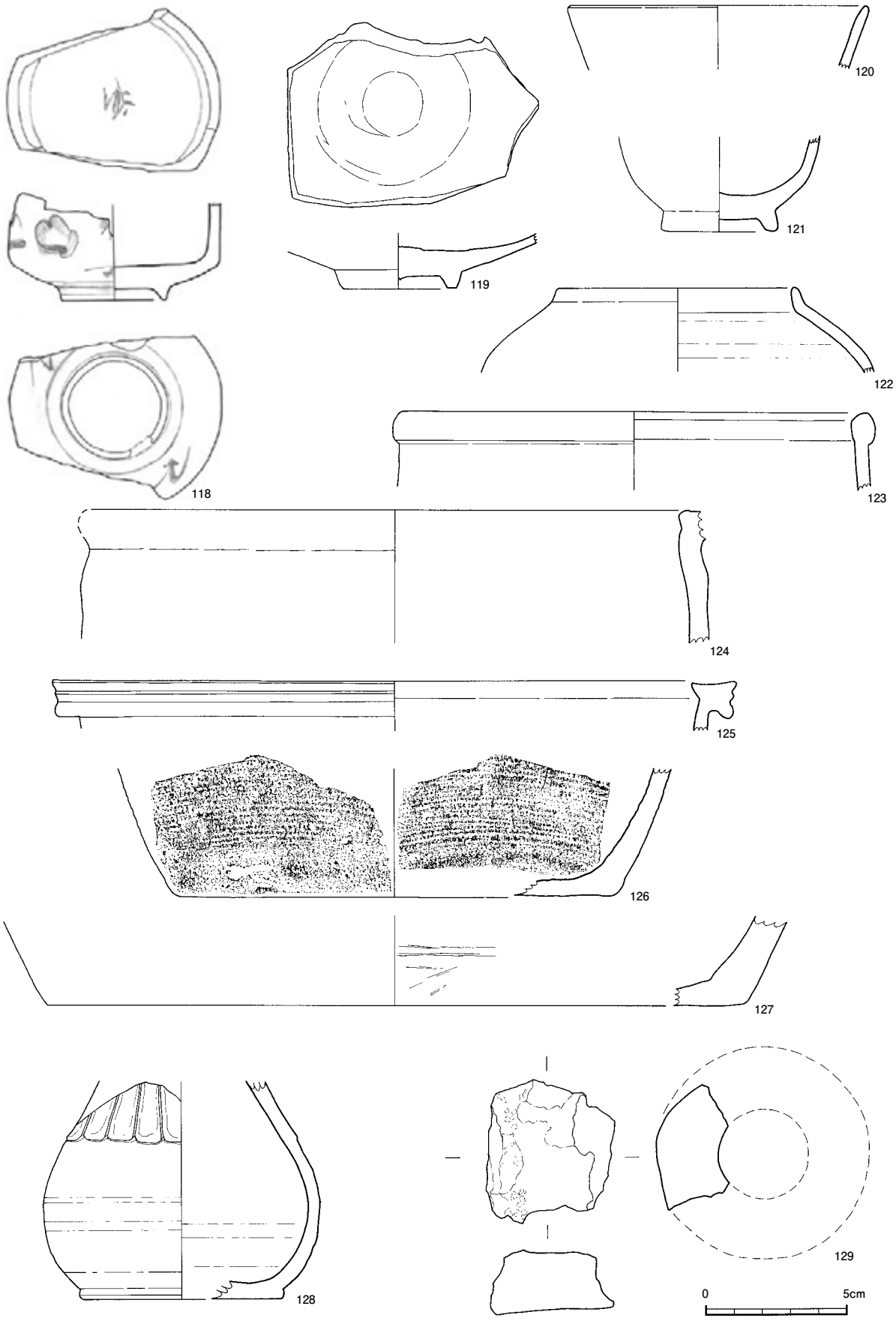
近世の遺構は確認されなかった。遺物は近世の薩摩焼や国内産の陶磁器が出土した。磁器では碗が，薩摩焼は土瓶や甕もしくは壺，瓶等が出土した。

近世の陶磁器・鞴（第27図　118～129）

118～122は磁器で19世紀のものである。118は肥前系の筒型碗で見込みには虫文が描かれている。119は肥前系の皿であり，見込みには蛇目釉剥ぎが施されている。120は内ノ山産の碗で銅緑釉が施され17世紀後半のものである。121は龍門司系の碗である。122～126は薩摩焼で19世紀のものである。122は土瓶の口縁部で，123は土鍋の口縁部である。124は甕か壺の口縁部で，125は甕の口縁部である。126は甕の底部である。127は瓦質土器の甕または壺の底部である。128は薩摩焼苗代川焼の団栗の形をした花瓶であり近代以降のものである。129は鞴の羽口で，外径が7.5cm，内径が３cmである。時期は不明である。

第11表　近世の遺物観察表（陶磁器）

挿図番号	遺物番号	種類	器種	部位	出土区	層位遺構	胎土	釉(薬)	露胎	焼成	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備考
第27図	118	磁器	碗	底部	－	表採	灰白	白	無	良	－	3.7	－	
	119	磁器	皿	底部	A－7	表採	白	明緑灰	無	良	－	4	－	蛇目釉剥ぎ
	120	磁器	碗	口縁部	－	表採	にぶい橙	暗青灰	無	良	10.7	－	－	内ノ山産　銅緑釉
	121	磁器	碗	底部	A－5	表採	浅黄	黄褐	底部付近	良	－	4.1	－	龍門司系
	122	薩摩焼	土瓶	口縁部	－	表採	にぶい橙	黒褐	無	良	8.2	－	－	
	123	薩摩焼	土鍋	口縁部	－	表採	にぶい橙	褐	無	良	16.4	－	－	
	124	薩摩焼	甕or壺	口縁部	－	表採	明褐灰	黒褐	無	良	22	－	－	
	125	薩摩焼	鉢	口縁部	－	表採	オリーブ黒	灰	無	良	20.5	－	－	
	126	薩摩焼	甕	底部	－	表採	にぶい橙	灰黄褐	無	良	－	16	－	
	127	瓦質土器	甕	口縁部	A－4	表採	にぶい黄	－	無	良	－	21.5	－	
	128	陶器	花瓶	胴部～底部	A－7	表採	褐灰	黒褐	無	良	－	7.2	－	



第27図　近世の遺物

第Ⅴ章　まとめ

遺構・遺物の概観

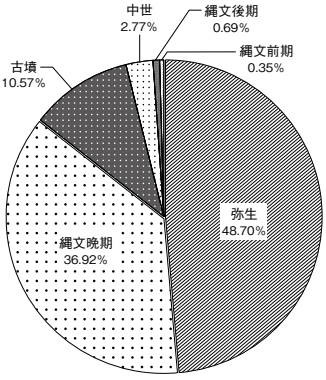
本遺跡からは，古くは縄文時代前期から近世までの遺構・遺物を検出・確認することができた。狭い範囲の成果ではあるが，縄文時代，弥生時代，古墳時代の歴史的流れが解明できたのではないか。以下，本遺跡の時代変遷について大まかに振り返ってみたい。

１　縄文時代

本遺跡においては，縄文時代の遺構は検出されなかった。遺物は前期２点，後期７点と極少量の出土に対して，晩期は215点とある程度の成果がみられた。さて，本遺跡に最初に足跡を残したのは縄文時代前期の深浦式土器の時期の人々である。継いで後期の西平式土器の時期の人々，そして晩期の上加世田式土器，黒川式土器の時期の人々である。しかし，前述したようにこれらに伴う遺構は残っておらず，土器や石器（打製石鏃・抉入石器・石核・石錘・磨石・敲き石・凹石等）の遺物だけが若干残存しているのみである。この状況から，本遺跡で当時の人々の生活を復元することは難しいが，この地に長期間居住したのではなく，短期間の生活の場として利用し，より安定した地域へと移動して行ったと考えたい。

２　弥生時代

弥生時代の土器は本遺跡の中で多数出土し（第28図参照），多大なる成果をもたらすことができた。Ⅰ類は断面が肥厚した方形状もしくは台形の口縁部をもつ弥生時代中期前半の入来式土器の特徴をもつ。Ⅱ類は厚く短めの口縁部が「くの字」状を呈し，口縁部上面が平坦面をもつ山ノ口式土器の特徴をもつ。Ⅲ類は口縁内面に突起を有し，上面に凹みをもつものである。また，Ⅱ類土器より大きくなる。これは黒髪式土器の特徴であるが，一部刻目の突帯を廻らす土器が出土し特異な例である。本遺跡から出土した弥生時代の土器から入来式→山ノ口式・黒髪式と歴史の流れを感じ取ることができ，黒髪式土器の出土から九州中央部との交流が行われたことが予想される。



第28図　時代別遺物出土の割合（総点数577点）

３　古墳時代

古墳時代の土器の数は少ないが，口縁部が外反し中津野式土器の特徴と思われる土器が出土している。他の土器は型式が特定可能な口縁部や底部等の部位などがないため型式判断が困難であった。しかし，丹塗りを施している坩形土器，高坏が出土し，祭祀的な様相が窺える。

４　古代，中世，近世

古代，中世，近世の遺物はほとんどが表層中出土であったが，遺構は中世の掘立柱建物跡が検出された。本遺跡は「本寺」という名称が含まれ，事実，発掘調査をしている周辺は中世後半頃に「寺」が存在していたことが伝えられている。他の柱穴と比較して，長径が大きくこの規模からして通常の住居とは異なる門柱的な特殊な建造物ではないかと思われる。また，その柱穴の底から古銭が出土した。このことから地鎮祭的な行事が行われたのではないかと予測される。

〈参考文献〉鹿児島県立埋蔵文化財センター　2005『大島遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター（80）
鹿児島県立埋蔵文化財センター　2007『持躰松遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター（120）

写 真 図 版

図版1

調査前風景　Ａ区側

調査前風景　Ｂ区側

Ａ３～５区下層確認トレンチ

Ⅲa層上面　石錘出土状況

作業風景１

Ａ－５，６区　Ⅲa層　遺物出土状況

図版２

基本土層

Ｂ－８，９区下層確認トレンチ

Ｂ－８，９区　Ⅲa層遺物出土状況

作業風景２

Ⅲa層上面溝状遺構検出状況

溝状遺構埋土状況

Ｂ－８区土層断面（溝状遺構断面あり）

溝状遺構完掘状況

図版４

ピット13検出状況

Ａ－3区　ピット13断面

ピット６断面

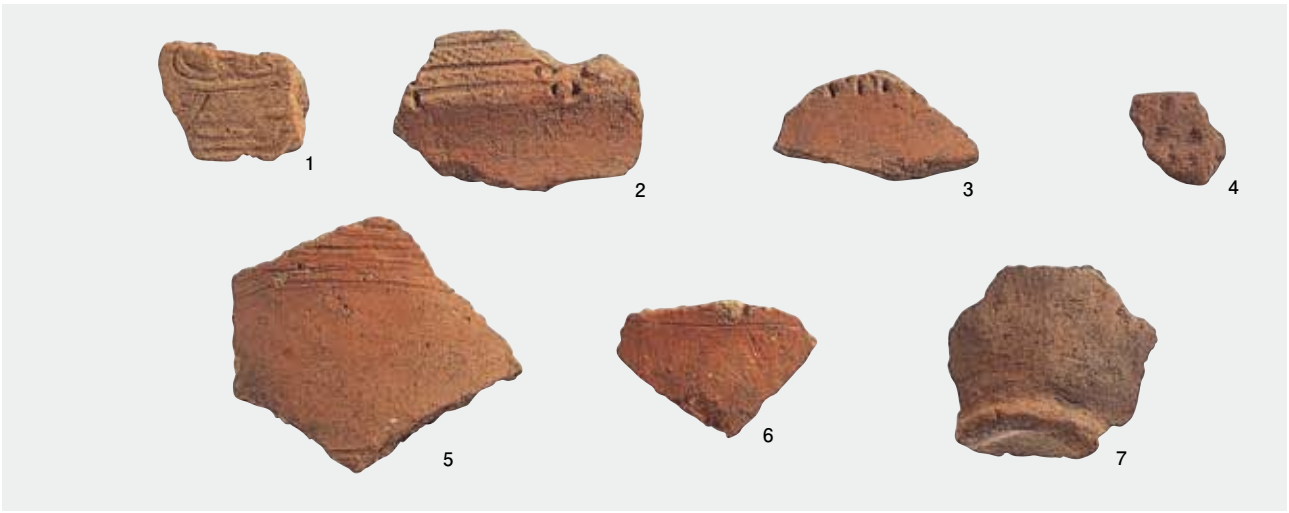
ピット６完掘状況

ピット５断面

ピット５完掘状況

ピット４完掘状況

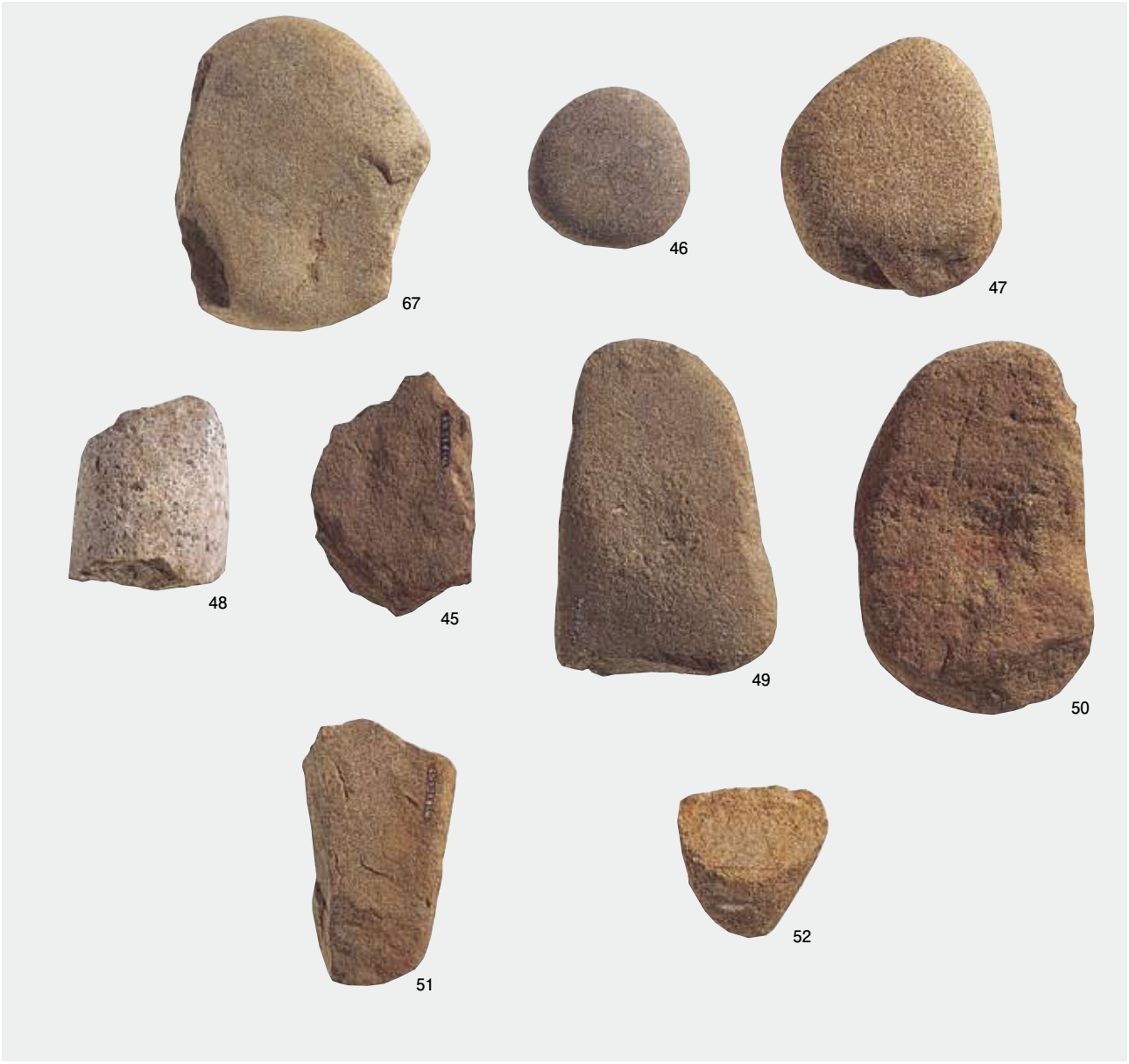
ピット４　遺構内遺物（古銭出土）



縄文時代の土器

図版6

縄文時代の土器と石器



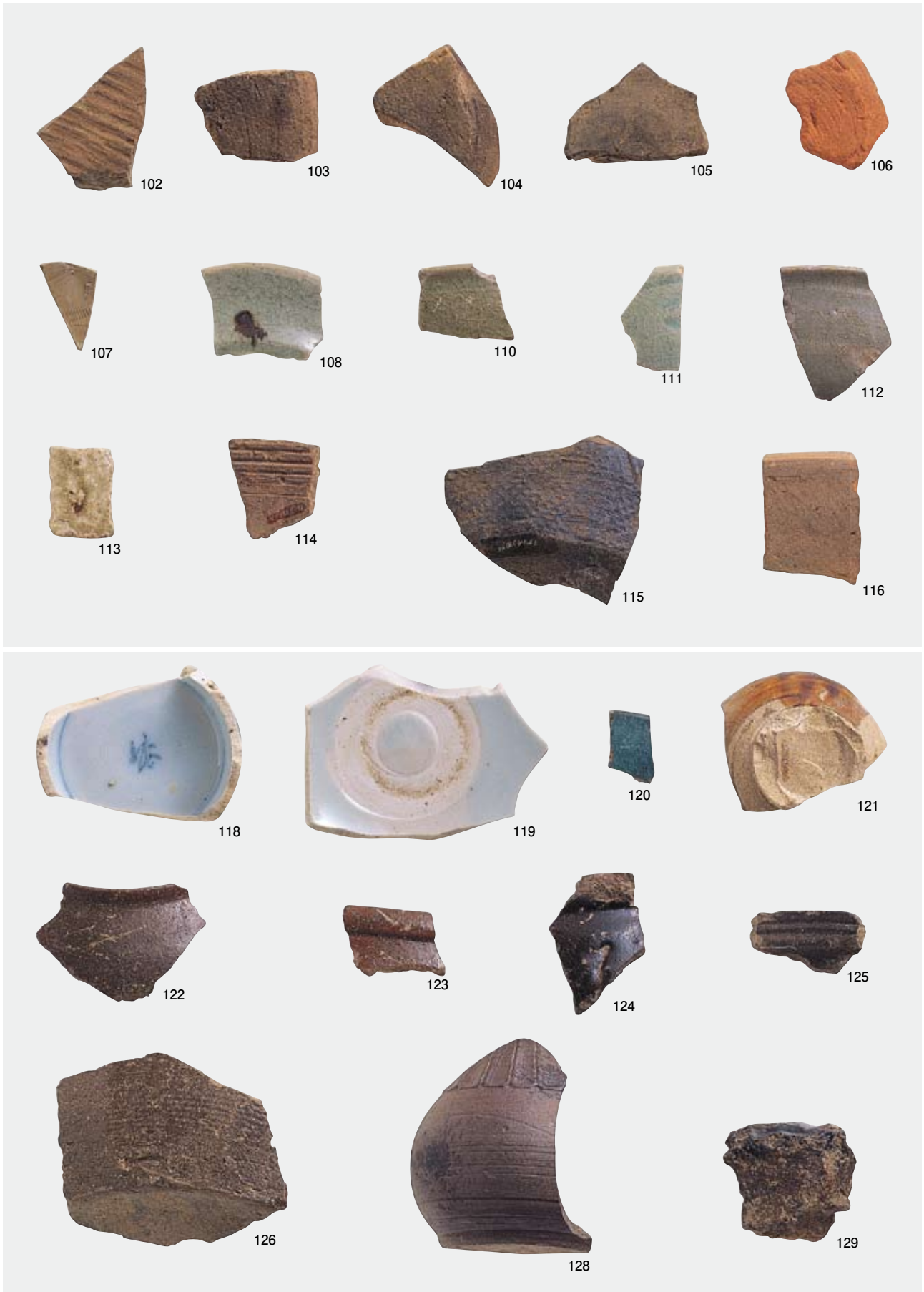
縄文時代の石器，弥生時代の土器

図版8

弥生時代の土器

古墳時代の土器

図版10



古代・中世・近世の出土遺物

あ と が き

国道226号線特殊改良工事（万世拡幅）に伴う発掘調査は，幅約５ｍの歩道建設部分を中心に調査を実施しました。調査が進むにつれて縄文時代晩期や弥生時代の土器が調査面積に対して多数出土し，２か月間の調査はまさに感動の連続でした。また，中世の掘立柱建物跡の柱穴の中に宋銭が納められていたことに当時の人たちの地鎮祭的風習を垣間見ることができました。

２か月間の暑さの厳しい中での発掘調査ではありましたが，南さつま市教育委員会や発掘作業員の方々の御協力により調査成果の貴重な資料を得るとともに，無事終了できました。調査後は，当センターで本遺跡の報告書作成に当たり，発掘調査から整理作業，報告書作成まで一連の作業を担当２人で通して携わることができました。更に職員や整理作業の方々の御指導，御協力をいただき心から感謝申し上げます。

この報告書が今後南さつま市の郷土を振り返るきっかけとなり，研究の礎になれば幸いです。

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（148）
国道226号線特殊改良工事（万世拡幅）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

油免・本寺遺跡

（南さつま市）

発行日　2010年３月31日
発　行　鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899－4318
鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号
ＴＥＬ（0995）48－5811
印刷所　株式会社 朝 日 印 刷
〒890－0055 鹿児島市上荒田町854－1
ＴＥＬ（099）251－2191